

2015年度 社会構築論系

地域・都市論ゼミ

ゼミ論文

地域の庭で育てるコミュニティ

—コミュニティガーデンを通じた緑とつながりの場づくり—

早稲田大学 文化構想学部 社会構築論系

浦野正樹ゼミ

1T120922-5

古田智美

目次

序章 はじめに

0-1. 研究動機／執筆意図	2
0-2. 研究方法	2
0-3. 論文構成	3

1章 公園緑地活用の必要性和コミュニティガーデンの提案

1-1. 現代における公園緑地の役割・必要性	4
1-2. 公園緑地活用の実態	6
1-3. コミュニティガーデンの可能性	11

2章 コミュニティガーデン比較研究

2-1. アメリカにおけるコミュニティガーデン	17
2-2. ヨーロッパにおける市民農園	18
2-3. 日本における市民農園・コミュニティガーデン	20
2-4. 日本と欧米の比較	22

3章 今宿コミュニティガーデンの事例

3-1. 今宿コミュニティガーデンの概要・成り立ち	27
3-2. 組織・体制	28
3-3. 効果—環境改善と多世代交流の実現—	29

4章 目黒天空庭園栽培ガーデニングクラブの事例

4-1. 目黒天空庭園の概要・成り立ち	33
4-2. 組織・体制	37
4-3. 効果—環境悪化阻止とコミュニティ再構成—	39
4-4. 目黒天空庭園におけるコミュニティガーデンと今宿コミュニティガーデンの比較と考察	40

終章 まとめ

5-1. 論文全体の流れ	48
5-2. 論文のまとめ	50
5-3. 謝辞	51

参考文献	53
------	----

序章 はじめに

0-1. 研究動機／執筆意図

近年、コミュニティガーデンという活動が都市におけるまちづくり活動の一つとして注目されている。コミュニティガーデンとは地域の住民グループが主体となって公園の一角や地域の遊休地を利用し、趣味、学習、環境保全など多様な目的を持って花や野菜を育てる活動のことである。このコミュニティガーデンが注目されているのは、この活動が都市環境の悪化、コミュニティの希薄化、高齢化、防災など現代社会の多くの問題を解決できる可能性を持っているからだ。コミュニティガーデンは、都市の緑地、人々の交流を生み出す場、高齢者の生きがい創出の場、災害時の避難所といった様々な場としての役割を果たすことができる。

コミュニティガーデンは市民農園や里山保全などの類似する活動を含め、様々な地域に広がっている活動であるが、ゼミ論文では特に都市部である東京・神奈川におけるコミュニティガーデンについて取り上げたい。このテーマを扱うに至ったきっかけは、筆者自身が東京の「都心において身近な緑の空間が少ない」、「既存の緑の空間が人で賑わっていない」ということについて問題意識を持っていたことである。前者については、近年自治体が建築物に対して壁面や屋上の緑化を義務付けているが、あくまで緑の量を増やすということにとどまっており、身近にあって親しめるといふ緑地にはなっていないと感じている。後者については、既存の緑の空間、すなわち公園等は整備が行き届いていないところが多く、人の寄り付かない犯罪の発生地やホームレスのたまり場となってしまうという状況を見て感じたことである。

そして、この2点から導き出した本論文のテーマが「都市の緑化可能な空間である公園などのオープンスペースにおいて、利用者同士のやりとりが生まれるような能動的な活動を行なうことで、都市に緑を増やし、且つその緑の空間を地域コミュニティ形成の場として有効活用することができるのではないか」というものだ。そのような考えから、テーマの条件に合致する「コミュニティガーデン」を取り上げることとした。

そこで本論文では、コミュニティガーデン活動によって地域に身近な緑の空間を作り出すことができると同時に、地域の人の交流の場をも作り出すことができるという仮説の下に、神奈川県横浜市旭区における今宿コミュニティガーデンと東京都目黒区立目黒天空庭園におけるコミュニティガーデンについて見ていくこととする。

0-2. 研究方法

文献調査とヒアリングを中心に執筆している。1~2章は基本的に文献をもとに分析を行った。2章では、わずかではあるがドイツの市民農園を実際に見学した際の様子を写真で紹介している。そして、3章以降はヒアリングをもとに対象地のコミュニティガーデンの実際の様子を描くようにした。

ヒアリングについては、今宿コミュニティガーデンでは今宿サマーフェスタと保育園向

け食育行事（サツマイモのつる返し）・収穫祭において行い、目黒天空庭園では NPO 大橋エリアマネジメント協議会・目黒天空庭園栽培ガーデニングクラブへのインタビューと収穫祭において行なった。

0-3. 論文構成

序章では問題意識、研究意図を中心に述べた。1 章では、都市の緑のオープンスペースを代表する公園を取り上げ、現代社会における公園活用の必要性について論じ、日本の都市の公園が現状どのように活用されているかについて確認を行なう。その上で、公園のような緑の空間を増やし、且つ地域コミュニティ形成の場として有効利用する方法の一つであるコミュニティガーデンに着目することを提唱する。

2 章では欧米におけるコミュニティガーデンと日本におけるコミュニティガーデンそれぞれについて、歴史・背景・施設概要・社会の中での位置づけ等を整理し、比較・考察する。なお、この際にはコミュニティガーデンと類似する活動である市民農園についても取り上げる。

3 章では実際の事例として神奈川県横浜市にある「今宿コミュニティガーデン」を取り上げ、コミュニティガーデンが地域の中でどのような役割を果たしているのかについて述べる。

4 章では東京都目黒区にある「目黒天空庭園」のコミュニティガーデンを扱い、3 章の今宿コミュニティガーデンとの比較を通して、コミュニティガーデンが地域に与える影響、また、コミュニティガーデンの性質と地域の背景との関連性、コミュニティガーデン活動全体の課題と展望について考察する。

最後の終章では論文を振り返り、まとめを行なう。

1 章 公園緑地活用の必要性和コミュニティガーデンの提案

1-1. 現代における公園緑地の必要性・役割

これまでの公園は主として子どもの遊び場や人々の憩いの場、運動やレクリエーションの場として機能してきた。また、時には自然災害の避難場所や生態系保全のための場所ともされてきた。これらの公園が担ってきた役割は時代によって変化してきたのであり、今後も変化していく必要がある。そのことを踏まえた上で、以下では現代の日本の都市において公園が担うべき役割について述べていきたい。

(1)緑化空間・環境の側面から

緑化空間・環境という視点から公園の役割を考えた時に挙げられるのは、自然溢れる景観の確保、ヒートアイランド現象対策、空気の浄化、生態系の保全、災害時の避難場所の確保などだ。

特にヒートアイランド現象対策や空気の浄化など、都市環境に関わる公園の役割は大きい。高度経済成長社会以降、都市化の進展に伴い環境に対する意識は高まり続けており、そうした状況の中で、一般市民にとって最も身近な緑化空間である公園の存在の重要性も高まりを見せている。

また、景観の確保に関しても、これまでは公園以外の場所すなわち土手や空き地、農地などが四季の変化を感じることができる空間として身近に存在していたが、都市化に伴って次第にそれらの空間は姿を消し、今ではほとんど公園のみが残されている状態となっている。それらの空間は子どもが自由に遊ぶ場・自然に親しむ場ともなっていたが、その役割も今や公園が担う他なくなっている。そうした事情の下、現代の日本の都市の人々にとっての公園の必要性は増してきているのである。

なお、ヨーロッパでは公園は「都市の肺」と言われているという。公園の緑は都市の空気の浄化をするのみならず、日々忙しい都市の生活に疲れた人々の精神をも癒す効果を持っているからだ。

また、公園は人間にとってのみ重要なのではなく、動植物の生態系を維持するためにも必要な空間だ。開発により失われた生態系を取り戻し、持続可能な都市とするためには緑溢れる安全で快適な公園の存在は不可欠である。

(2)地域の資源としての側面から

公園は上手く活用できれば、地域コミュニティ形成の場となり得る重要な地域資源なのである。何故なら、地域コミュニティの土台となる人と人同士のつながりや、コミュニティの成員各自が持つべき人と地域・自然とのつながり等、様々なつながりを生み出すことができるのが公園という場であるからだ。

公園で生まれるつながりとは以下の4つが挙げられる。

①人と人とのつながり

地域の大人同士、子供同士のつながりをはじめ、おとなと子どもといった多世代のつながり、家族同士のつながりなど、最も基本的なつながりである人間関係を創る。

②人と自然・社会とのつながり

人は自然とつながることにより、感性を癒し、人として再生が図られる。また、社会とつながることで生きがいや自己実現など人生のQOLの向上を図ることができる。

③人と地域とのつながり

人が地域とつながることで、地域の歴史や文化が継承され、過去・現在・未来への時間のつながりが地域への愛着やふるさと意識を育む。

④地元組織・団体とのつながり

屋間、地域にいるのは地域の人だけではなく、地元企業や行政で働く人たちである。地元組織・団体の人とのつながりが「地域の見守り」機能を果たし、防犯対策や災害時の対応など地域の安全と安心を醸成する。

(財団法人東京市町村自治調査会、2009、pp.154-155)

この中で、特に①のつながりは、今後の高齢化が進む中でますます重要なものである。高齢化が進むということは、日常の大半を地域で過ごすようになる人が増えるということであり、高齢者と地域の関わり方に変化をもたらすと考えられる。最近では「中高年公園デビュー」という言葉も存在し、定年後のシニア世代が地域社会に溶け込むための場として公園が重視され始めている。

また、人口減少が進む中で元気な高齢者の活躍が期待されており、彼らが地域の活性化や地域課題解決の担い手となることが求められている。そうした背景から、公園は高齢者が地域で活動する拠点として注目されているのである。

なお、高齢化と同時に、少子化の観点からも公園の存在は欠かせない。子どもたちが社会とつながる場、大人に見守られながら自由に遊ぶ場、また、子どもを通じて親同士の人間関係も生まれる場として、公園は子育て支援の一端を担うことができる。

(3)まちづくりの舞台として

行政主体のハードのまちづくりから住民主体のソフトのまちづくりへの移行が叫ばれている今日、公園は住民がまちづくりを実践する舞台としてぴったりの場所である。

その理由としては、公園はまちづくりの中で比較的取り組みやすい分野であるからだ。公園や緑地を通してのまちづくりは、まちづくりの大きな障害である利害関係のこじれの

心配が少ない。全く生じないとは言わないが、マンションや商業施設などの建設に比べれば、深刻さは少ない。そういった意味で、緑を通じてのまちづくりは住民主体で取り組みやすいものとも言えるのである。また、公園は世代や性別、職業などにおいて利用者を選ばないため、住民が平等に意見をぶつけ合うことができる。その過程を経て、地域の人間関係が深まっていくことも期待できる。

1-2. 公園の活用の実態

前項で公園が果たすべき役割について述べたが、それでは、現状の公園はそれらの役割を果たしているのか、実際に人々にどのように活用されているのかということについて、実態を追っていきたい。

(1)面積や量について

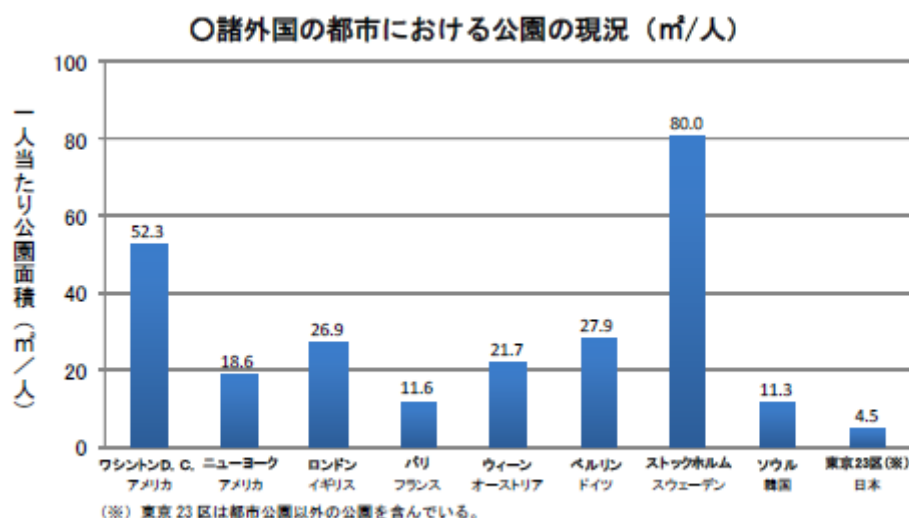
まず、基本的なデータとして、日本の大都市にあたり、本論文の 3 章以降で扱う事例の所在地である東京・神奈川に公園はどのくらい存在しているのか確認したい。国土交通省による都市公園データベースの中の「都道府県別一人当たり都市公園等整備現況（2014年3月）」によると、以下の量の公園があることが分かった。

東京…設置箇所数：3803 箇所、公園面積：3034ha、1 人当たり公園面積：7.3 m²/人

神奈川…設置箇所数：2979 箇所、公園面積：2065ha、1 人当たり公園面積：6.5 m²/人

そして、これはどの程度の数字なのかを知るために、諸外国と一人当たり公園面積を比較した以下のグラフを参照したい。

図 1 諸外国の都市における公園の現状



(国土交通省「平成24年度末種別毎都市公園等整備現況」)

このグラフからは、世界の主要都市と比べて東京の一人当たりの公園面積は半分以下であることが分かる。ここでは、その数字の小ささについて詳しい言及はしないが、東京の都市環境は決して優れているとは言えないということを確認しておきたい。

(2)公園利用の実態

次に、現状人々は公園をどのように利用しているのだろうかということについて見ていく。

財団法人東京市町村自治調査会が2008年に多摩地域に住む20歳代、30歳代、40歳代、50歳代、60歳代以上の計1,000人を対象に行なった市民ネットアンケート調査の結果では、以下のような結果が出ている。なお、このアンケートでの「小規模な公園」とは自宅から歩いていける範囲にある公園を指し、「大規模な公園」とは総合公園や運動公園など広域に居住する人が利用する公園を指している。

図2 「小規模な公園」の利用目的（複数回答）

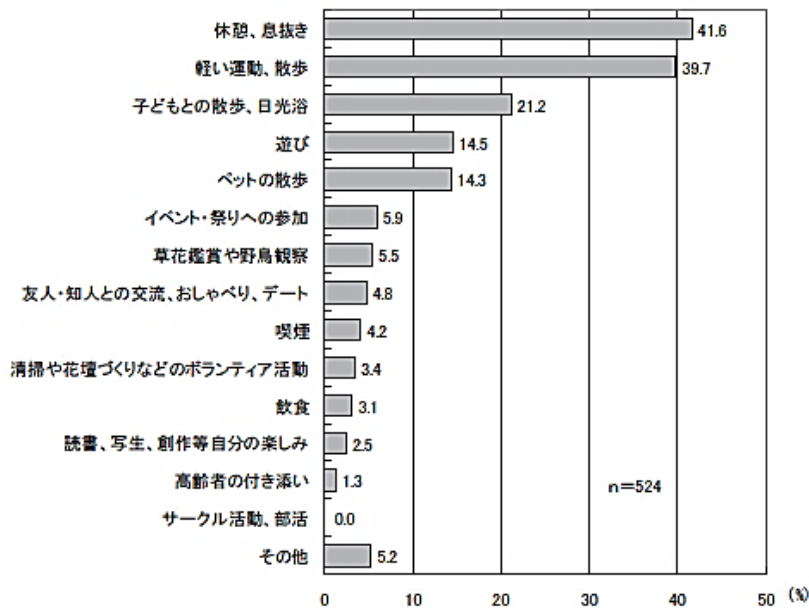
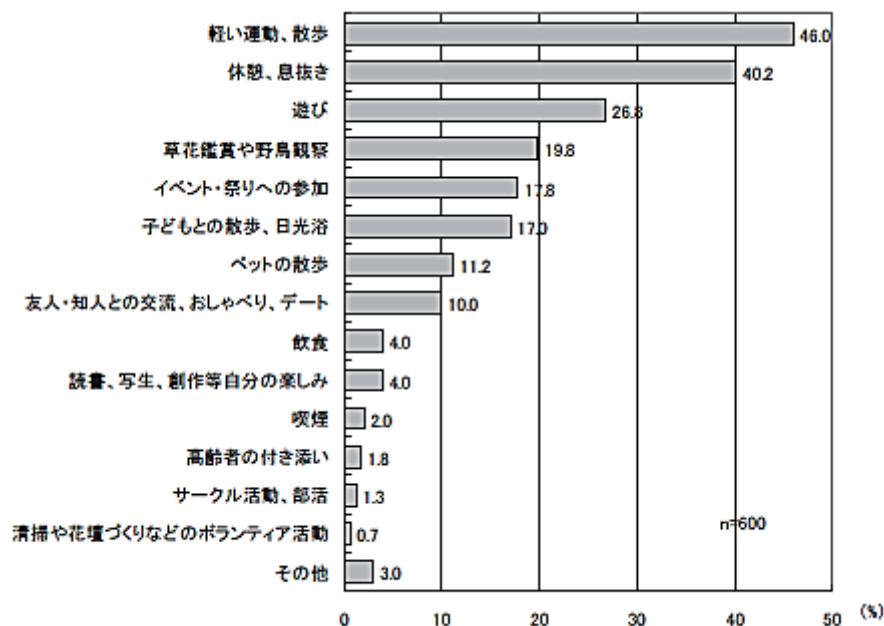


図3 「大規模な公園」の利用目的（複数回答）



(図2・図3 財団法人市町村自治調査会、2009、p.93・p.104)

この結果から分かることは、公園は前項 1-1. (2)の部分で述べたように人や地域のつながりを生む可能性を持っているのにも関わらず、そのような可能性が活かされていないということだ。アンケートの回答結果の項目の中で、一人で行なうのではなく他人（元々近い友人等ではなく近所の知り合い等）とのやりとりが入るであろう能動的な活動は、「イベント・祭りへの参加」と「サークル活動・部活」、「清掃や花壇づくりなどのボランティア活動」であるが、それらの項目はいずれも小さな公園においては 10%以下であり、大きな公園においてできさえ 20%以下でしかない。

一人で休憩ができるのも公園の大事な機能であるが、せつかくの地域の資源である場をもっと住民同士の積極的な交流の場として使えないだろうか。それとも、交流の場としては使いにくい・皆が集まりにくい理由があるのだろうか。

そこで、その点について探るため、次に公園を利用する際に困っていることについてのアンケート結果を見てみたい。

図4 「小規模な公園」を利用する際に困っていること

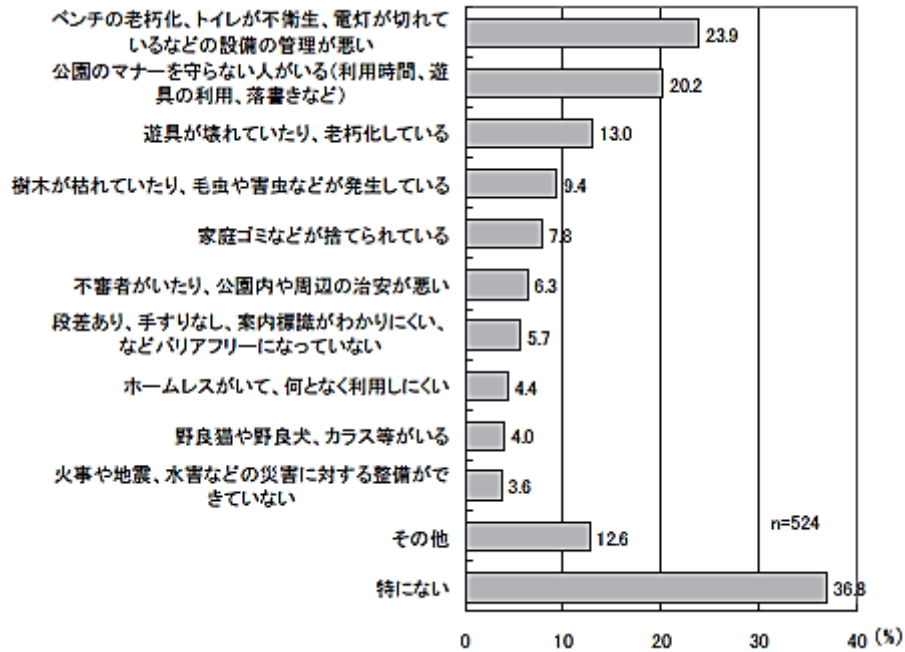
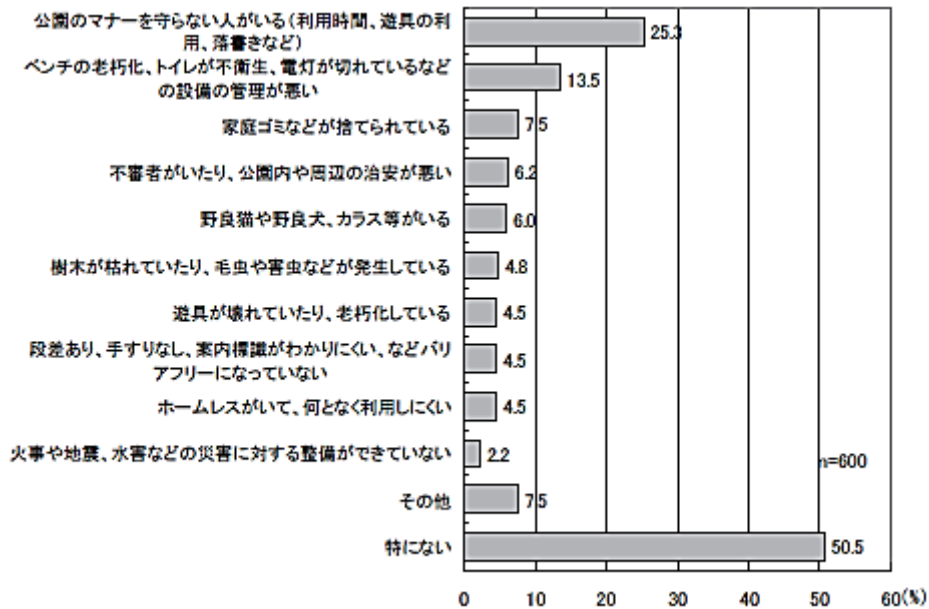


図5 「大規模な公園」を利用する際に困っていること



(図4・図5 財団法人市町村自治調査会、2009、p.100・p.110)

以上の結果からは、大きく分けて、設備の問題・マナーの問題・治安の問題が目立っている。このことから、公園が地域の住民同士の交流の場として活用されない理由としてど

ういったものがあるのかというと、おそらく、「管理が不十分で設備が整っていないため利用したくない」「マナーを守らない人に嫌気がさした」「治安が悪く、不安なので近寄りたくない」というようなところではないかと想像される。

本来、安全で快適な憩いの空間であるはずの公園は一体どうしてこのような状態になってしまったのだろうか。こうした問題が発生している背景には、日本のこれまでの公園形成の歴史、公園管理のあり方にある。公園の管理は行政の役目であり住民は関与しないものだと思われてきたのだ。また、実際に公園の管理は長らく行政のもとになされていた。元々日本では、欧米諸国と違ってオープンスペースを住民みずから意識的につくり出す伝統に欠けていた。ヨーロッパでは近代以前からコミュニティ内部で公共空間に関するルールが議論され、空間が確保されてきた一方、日本では明治政府以降に国によって決められてきた。その違いは大きく、日本の市民にとって公園はお上がつくって与えてくれるものと考えられてきたのだ。

そのため、公園で困ったことがあっても対処するのは行政であり、問題が放置されている公園は近づかないほうがよい場所として、住民から遠ざけられるばかりである。ここで、公園と利用者の間にある距離の遠さについて、同じ緑の空間である庭と比較して記述した文章を紹介する。

都内にある集合住宅で、建物まわりの共有地に庭をつくっている人たちに、庭と公園の違いをたずねたことがある。いちばんの違いは、庭はさわることができるけれど、公園はさわれない、見るだけというものだった。…(中略)…このさわれないという言葉に、公園と利用者とのあいだに存在する距離の遠さがあらわされている。公共の、だからみんなのものである公園。けれどそのみんなのなかに、わたしは入っていない。

(小野、1997、p.6)

まさにこうした感覚が市民の中にはあるのではないだろうか。そして、この感覚があるために公園は地域住民同士の交流の場としてあまり利用されないようになってしまっているのではないだろうか。

そうだとすると、そのままでは公園が持つ可能性を地域のために活かすことができない。人同士の交流があつてこそその公園である。人の集まりがまた人を呼び、賑わいが生まれることが公園の魅力を高める。そして、魅力ある公園は地域の人々のお気に入りの場所となり、さらに多くの人に活用されるようになる。

また、草津市で行なわれた公園に関する調査では、公園でよく話をする人は生活満足度が高いという結果も出ている。(高村、2012、p.65)

以上のことから言えるのは、住民が自分たちの場だと思える交流拠点としての公園づくりは住民福祉の一環としても必要なものだということだ。

1-3. コミュニティガーデンの可能性

本項では、前項までで見てきた公園の現状を踏まえた上で、その現状を改め、もっと地域のために公園（もしくは公園的な利用が可能なオープンスペース）を有効活用できる方法としてコミュニティガーデンの可能性について述べていく。

(1)コミュニティガーデンの定義・概要

コミュニティガーデンとは、地域にある共有スペースを使い、住民が主体となって皆で栽培・園芸を行なうという活動である。

公園などの公共空間とコミュニティガーデンとの違いは、責任を持つ主体が自治体などの公共であるか、地域住民であるかということだ。コミュニティガーデンは住民が責任を持つ緑地空間であり、住民が行政や専門家と協働しつつ地域の庭を作り上げていくというスタイルの活動だ。その過程では野菜や花が育つだけではなく、近所のつながりや地域への愛着・誇りも育っていくため、単なる栽培活動ではなく、地域改善運動やまちづくり活動の一つとして捉えられている。

(2)市民農園との違い

コミュニティガーデンと類似する活動・空間として「市民農園」というものがある。コミュニティガーデンと市民農園は、市民が栽培・園芸活動を行なうという意味では活動内容はほぼ同じであるが、法律や利用目的により区別されている。

市民農園は「市民農園」という法律用語があり、農地を使って設置される貸し農園のことを言う。そこでは、利用者（主に都市住民）が区画割りされた農地を借りて、野菜や花を栽培することを楽しむのである。利用者の目的はレクリエーションであることが多いのが市民農園だ。一方で、コミュニティガーデンは設置される場所が農地ではなく、公園など公有地であることが多い。

また、後に詳しく述べるが、元々地区の環境改善活動としてスタートしたという歴史的な背景があることから、市民農園より高い公共性や地域連帯性を持つものを指してコミュニティガーデンと呼ぶという考え方もされている。ヨーロッパで古い歴史を持つ市民農園と、アメリカで比較的最近に生まれたコミュニティガーデンではやや性格が異なっている。

(3)コミュニティガーデンの理念・形態

①理念

コミュニティガーデン発祥地であるアメリカの全土で共通している活動の基本理念は以下のものである。

①近隣に対する景観や美観の創出・復元

②サステナビリティ（持続可能性）を意識した地球資源の保護・自給自足の促進

- ③安全性や栄養価の高い植物の生産・確保
- ④社会教育（レクリエーション）の参加体験現場の創造
- ⑤社会的相互作用を生み出す協働の場の創造
- ⑥社会的アクセシビリティ（到達容易度）を重視した場の創造

（日本園芸福祉普及協会、2002、pp.76-77）

以上の文言からは、アメリカではコミュニティガーデンを通して、景観から環境保全、食の安全、教育、人々の協働の場づくりまで幅広い範囲に対して取り組もうとしていることが分かる。

②形態

形態は、主に以下のタイプに分かれる。

I. 公共系施設内に位置する一般的な区画型ガーデン

公園、学校、植物園、教会などに設置されている一般的な「庭」のようなタイプのものを指す。

II. 公共および民間所有の遊休地内、未利用地内に位置するテーマ型ガーデン

工場跡地や、空き家、空き店舗などを放置されたままにせず、コミュニティガーデンとして利用するタイプのものを指す。

III. 幼児、児童、青少年、学校教員等対象の教育型ガーデン

自然教育や食育のために、農作業を体験することができるタイプのものを指す。「ふれあい農園」や「体験農園」などと呼ばれるものもある。

IV. ホームレス、障がい者、刑務所（少年院）出所者等対象の社会復帰更正型ガーデン

リハビリや社会適応訓練等の目的で利用されるタイプのものを指す。

(4)コミュニティガーデンの機能・特徴

コミュニティガーデンの機能・特徴は多岐にわたるが、代表的なものとして以下の7つの機能が挙げられる。

①環境保全機能

花や野菜が栽培されるガーデンは都市部において緑地環境を確保する役割を果たしている。その他にも、美しい景観の創出、温度や湿度の調節、減音・遮光効果、防音効果、土壌保全、水資源の確保、生態系の保全など、緑の空間が果たす環境保全機能は多岐にわたっている。

また、野菜や花による緑化は特に環境保全機能が高いと言われている。現在ヒートアイランド現象の緩和対策として国や地方自治体が大型のビルに屋上緑化を義務付けているが、この屋上緑化によく使われる植物は、蒸散作用の程度の問題でヒートアイランド現象対策としてはあまり効果がないものであるという。そうした植物の代わりに野菜を植えることはより高い効果をもたらすとされている。

②コミュニティの創出

コミュニティガーデンにおいてはメンバーが共通の場で活動するうちに、自然とメンバー同士の交流が生まれる。家族全員での参加やさまざまな年代の参加者の交流は、親子の触れ合いだけでなく多世代交流の機会を生み出す。コミュニティガーデンで顔見知りになるということが地域の防犯意識の向上や、災害時など緊急事態の場合の助け合いにつながる。

コミュニティガーデンでの活動は、単発的なイベントや町内会などの地域組織による義務的な関係とは異なるため、自然な形で地域のつながりを生み出すことができる。

③高齢者の生きがい創出

コミュニティガーデンは高齢者にとって日常的に人と交流するきっかけを作る場となる。収穫量を友人と競うことで生活に張り合いがでたり、採れた野菜を子どもや孫に送って喜んでもらうことが高齢者自身の喜びになったりと、高齢者を元気にする要素が多い。また、コミュニティガーデンは高齢者が社会的役割を得られる場所でもある。初心者に野菜作りの指導をするといった仕事を与えられることで、社会的役割を果たしている実感が得られるようになり、生きがいを感じられる。

今後ますます高齢化が進むなかで、コミュニティガーデンは高齢者の生きがいとなる活動の場を提供できるという期待が高い。

④教育的機能

コミュニティガーデンは普段土と触れ合うことの少ない都市住民にとって、自然と触れ合うことのできる貴重な場となる。自らの手で作物を育てるということは、子どもはもちろん大人にとっても自然教育の機会となる。

特に子どもへの教育効果は大きく、情操教育・食育の場として利用され得る。農業体験を通して生命の大切さを学ぶことは効果的な情操教育となり、自らの手で困難を乗り越えて育て上げた野菜を大切に食べるということは食育となる。これらは、いずれも健全な成長のために重要な学びである。

⑤健康増進・医療機能

農作業は適度な運動の機会となり、体力の衰えを防ぐ。また、そうして育てた結果採れ

た新鮮で栄養価の高い野菜を食べることも健康によい。そのような肉体的な健康増進効果に加え、植物と触れ合うということは精神的な健康増進効果に優れている。植物と触れ合うことはストレス解消効果に優れており、現代社会で深刻なうつ病や自殺といった問題も解決に導く力を持っているという。実際に園芸療法として心身障害者や療養者のリハビリテーションの場・社会適応訓練の場として活用されているコミュニティガーデン・市民農園が存在する。

また、元々健康な人にとっても農作業を通して友人ができること、生産物を家族や近所の人と分け合うこと等で人とのやりとりが増えることは精神の健康増進効果がある。核家族化や個人主義の進行により孤独感にさいなまれる人が増えている中でこのような効果は重要である。

⑥防災機能

構築物の無いガーデンは地震などの災害が起こった際の避難場所として活用することができる。また、植物は火に強く、火災時の延焼を防ぐという性質を持っている。その他にも復旧作業用地や資材置き場としての活用も可能であるうえ、深刻な災害時であれば農地の野菜を食糧として活用することもできる。阪神淡路大震災では、兵庫県の市民農園が避難場所として利用されたという。

⑦自治体の経費節約・住民との協働の機会創出

自治体が所有する土地を使ったコミュニティガーデンにおいては、住民らが自身の手で手入れを行なうため自治体の経費節約になる。

また、住民と行政が協働するよい機会となり、行政による枠組みと住民による柔軟なアイデアを合わせることで官民一体の街づくりが可能となる。

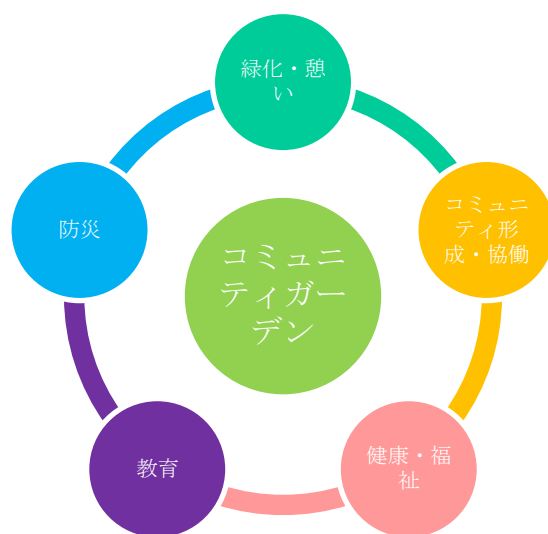


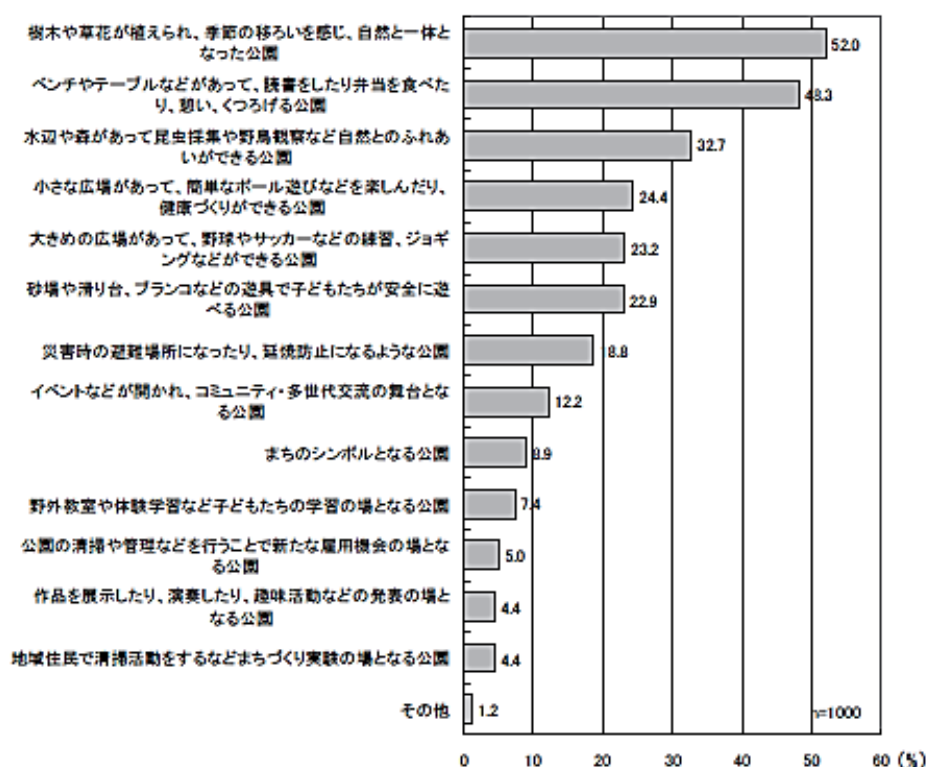
図6 コミュニティガーデンの機能について（筆者作成）

(5) コミュニティガーデンの提案

以上の機能は、1-1、1-2 で見てきた公園が果たすべき役割と重なる、またはプラスアルファとなるものであり、公園の問題点を解決できる機能である。環境問題に対応でき、コミュニティ形成も可能、住民主体で管理するためマナーや治安の心配も少ない。これらのことから、今後の少子高齢化社会における持続可能なコミュニティの形成や都市の緑地化等に対して、コミュニティガーデンは非常に有効な対策案となると言える。特別な場所・資金がなくても実施でき、多方面の問題をケアすることが可能なコミュニティガーデンは今後の社会でこそますます大きな意義を持つことになるだろう。

さて、以上で見てきたように、コミュニティガーデンは実施する価値の大きい活動であるのだが、実際に活動主体となる住民側にニーズが無ければコミュニティガーデンの提案には意味が無い。果たしてコミュニティガーデンのような活動にニーズはあるのだろうか。そのことを確かめるため、財団法人東京市町村自治調査会が2008年に行なった市民ネットアンケート調査の結果において、あったらいいと思う公園について訊いた、以下のデータを参照する。

図7 「あったらいいと思う公園（複数回答）」

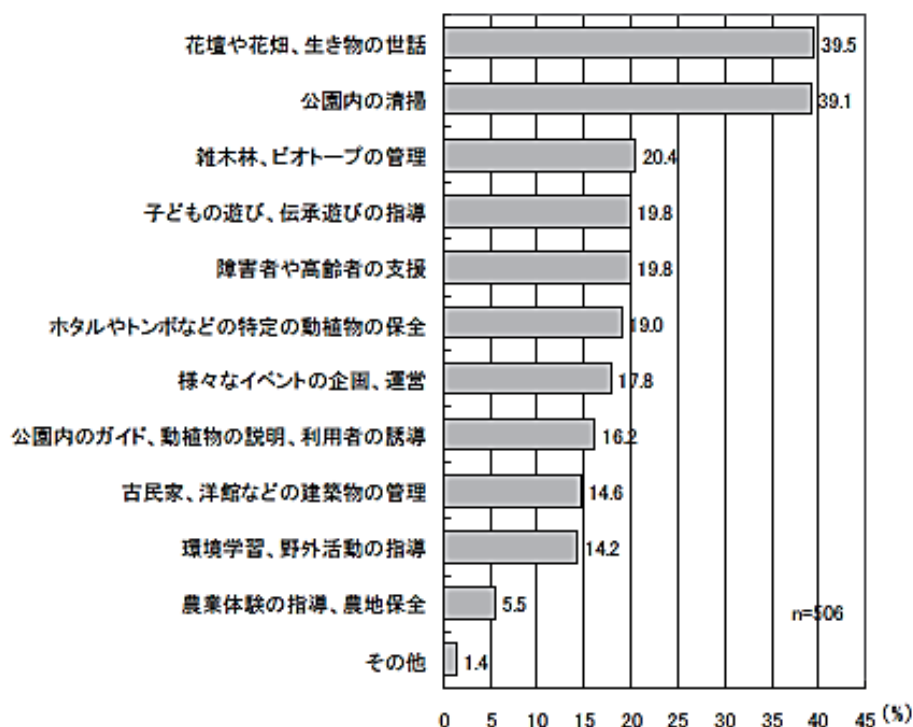


(財団法人東京市町村自治調査会、2008、p.116)

結果は、「樹木や草花が植えられ季節の移ろいを感じ自然と一体となった公園」が 52.0%と、多くの人が自然あふれる公園を望んでいることが分かる。

さらに、公園における市民活動への今後の参加意向に関する設問の中の「参加してみたい活動内容」という項目では「花壇や花畑、生き物の世話」が 39.5%で最上位にきている。

図 8 参加してみたい活動内容（複数回答）



(財団法人東京市町村自治調査会、2008、p.123)

これはまさにコミュニティガーデンの内容と一致しており、コミュニティガーデンにはニーズがあるということの証明となっている。

これだけニーズがあり、積極的にやりたいと思っている人がいるということは、もし実現すれば個人の楽しみがコミュニティづくりにつながるということになる。自分が個人的にやってみたいと思っている栽培という活動が他人に対して楽しみを提供し、さらには環境を良くするのである。特別に意識をしなくとも社会貢献につながることは、コミュニティガーデンとは大変得な活動であると言わざるを得ない。

時間のある高齢者の増加や、価値観・ライフスタイルの変化によるボランティアやまちづくり活動への意欲の高まりといった背景がある中で、今後コミュニティガーデンへの注目は増していくに違いない。

2章 コミュニティガーデン比較研究

この章では、前章で提案しコミュニティガーデンの先進国であるアメリカやヨーロッパでの歴史や社会背景、利用の実態などについてまとめ、日本との比較を行なうことで、コミュニティガーデンとはどんな活動であるのかを詳しく理解していきたい。

2-1. アメリカにおけるコミュニティガーデン

(1)歴史・変遷

コミュニティガーデンの発祥地はアメリカである。コミュニティガーデンの初期の用途は、低所得者層の自給用農園や戦時中の食糧増産用の農園といったものであった。一説には、1893年にデトロイト市において、当時の市長であったH・S・ピングリーが低所得者に植物を育てるための土地を割り当てたことから始まったとされている。

現在のコミュニティガーデンの用途、すなわち、地域の環境改善や緑を通してのコミュニティ形成という用途で利用され始めたのは、1960年代からである。景気の停滞や人種差別抵抗のための公民権運動などの影響により社会が不安定で街が荒廃していた時代に、地区の環境改善運動として始められた。地域に共有の庭をつくることは、住民相互の努力を促し、社会基盤の衰退を防ぐために有効なことだと考えられていたのである。また、この時代は公民権運動が盛んであったことから、市民が自主的に行動を起こし現状を変えていこうとする流れが存在していた。コミュニティガーデンもまさにその流れに合致した市民による抵抗運動の一つとして広まっていったのである。

具体的には、1973年にニューヨークで起こった「グリーンゲリラ」の活動が今のコミュニティガーデンの発端となったと言われている。当時のニューヨークでは金融危機からの不景気によって人口流出と住宅損失、空きビル増加が続いていた。それにより空き地が増え、盗難自転車の放置や麻薬の密売等の犯罪がのさばる温床となった。しかし、これらの空き地は公園として再整備されることもなかった。そうした時に、画家のリズ・クリスティーとその仲間が自らをグリーンゲリラと名乗って空き地に花の種と水、養分を入れた風船を投げるといった活動を始めたのである。この運動は無許可であったものの、都市環境と生活を改善する活動であるために、NY市当局からは黙認されていた。この活動により「リズ・クリスティーとパワーハウス・ガーデン」がつくられ、このコミュニティガーデンをきっかけにして、コミュニティガーデンづくりがニューヨーク市に広がった。

その後、グリーンゲリラ達は1978年に緑化運動を合法化する要望を市に申し入れ、グリーン・サムという非営利団体を設立することとなった。

アメリカではこのグリーン・サムのようなNPOが住民グループに作業の指導などを行なっており、コミュニティガーデンのさらなる普及に努めている。その結果、今ではニューヨークを越えてアメリカ全土に広まっている。

(2)社会における役割・位置付け

コミュニティガーデンと一言で言っても、国・地域によってそれぞれ課題やテーマが異なり、社会・地域における役割や位置づけは異なる。

まずアメリカにおいて根底にある考えとして共通していることは、コミュニティの問題はコミュニティの中で解決していくべきであり、そのための場所のひとつとしてコミュニティガーデンがあるということだ。こうした姿勢は、もともと開拓民としての歴史を背負っていることから来ていると言われている。

そして、実際にどのようなコミュニティの問題を解決するのかということは当然地域ごとに異なってくる。例えば、ニューヨークのようなあらゆる人種・民族の集う地域においては、それぞれの住民の価値観や生活様式は異なっており、住民同士が相互に関わり合い、地域に目を向ける機会は限られてしまう。そうした貴重な機会を作り出せるのがコミュニティガーデンなのである。また、同じくニューヨークのハーレム地区にある、先述のNPOグリーン・サムによって支援されているコミュニティガーデンは、キッチンガーデンとして裕福でない層の住民の生活を支えることを目的としている。

一方で、純粋に憩いの緑化空間としての役割を果たしているコミュニティガーデンもある。以下の記述は、ニューヨーク・マンハッタンのハウストン東通りにつくられた「リズ・クリスティー・バワリーハウストン・ガーデン」のある日の様子を描いたものである。

ベンチに座って語り合うカップルや、池の周りで騒ぐ学生グループ、犬と一緒に座って本を読む女性等、来訪者が思い思いの時間を過ごしている。一見、公園での楽しみ方と変わりなく見えるが、明らかにコミュニケーションの質が異なる。管理しているメンバーがつとめる小屋の周りで、まるで井戸端会議のような会話が始まるのである。パブリックとプライベートがはっきりと分かれるニューヨークにおいて、この場所がプライベート空間であると感じさせる光景である。このパブリックに開放されたコミュニティのためのプライベート空間は、セントラルパークとはまるで異なる居心地の良さを、近隣住民やその他の来訪者に与えている。(赤澤、2006、p.197)

このように、このマンハッタンのコミュニティガーデンは住民にとって親しみやすい憩いの空間として利用されていることが分かる。

ここでは、生活を支えるためのガーデンと憩いの空間としてのガーデンを例に挙げたが、他にも教育や健康を目標にしているガーデンもある。地域の課題に合わせて応用が利くというところがコミュニティガーデンの大きな強みなのである。

2-2. ヨーロッパにおける市民農園

(1)歴史・変遷

前項で取り上げたアメリカではコミュニティガーデンが一般的だが、ヨーロッパではコ

コミュニティガーデンが始まるより以前から市民農園が根付いている。

市民農園はイギリスの18～19世紀の土地囲い込み運動や産業革命期において、共有地を失った貧しい労働者に自給農園を貸し与えるところから始まった。その後、1831年に有料菜園が登場し、19世紀末には法律が制定された。

イギリスから始まったこの農園は農業技術と共にドイツにも導入された。1832年には市民農園第一号がライプツィヒに設置され、その後の1865年には医師シュレイバー博士によって子どもの健康のための農園が提案された。当時は工業化が進む中で大気汚染により街が劣悪な環境となっていたため、安全な遊び場が必要だと考えられたのだ。この農園が現在広く知られている「クラインガルデン」の原型である。1919年にはドイツにおいても市民農園に関する法律が制定された。

こうした歴史から分かるように、市民農園は元々「食糧自給」や「健康」といった概念からスタートしており、ドイツにおいて概念が拡大し、他のヨーロッパ諸国にも広がっていった。

市民農園が各国に定着してきた1926年には国際連盟が発足し、以後定期的に国際会議が開催されている。そのように国際的に普及していった市民農園は、20世紀には二度の世界大戦の食料自給の必要性から著しく発展した。その後から現在に至るまでは、経済成長や余暇の増大とともに耕作空間から都市公共緑地・都市住宅政策としてのものになっていった。

(2)社会における役割・位置付け

①ドイツの場合

ヨーロッパの中でも特に市民農園が盛んなドイツにおいては、公園緑地の数十パーセントが市民農園であることも珍しくなく、一般市民の散歩に開放され、貴重な憩いの場・都市の公共緑地として役割を果たしている。

ドイツの市民農園は「クラインガルデン（小さな庭）」と呼ばれ、日本の市民農園よりも大規模なものが多い。クラインガルデンの中には農作業の合間に休憩するための小屋や利用者が集まれる集会所が整備されている。

なお、ドイツでは医者にクラインガルデンの利用を勧められることもしばしばだそうであり、それほどまでに社会的認知度が高く、健康効果が認められていることが分かる。

また、ケルンにおける市民農園では、行政が人種間の融和のためにクラインガルデンを活用しているという。ヨーロッパは地続きであるために様々な人種・国籍の人々が混ざり合って生活しているが、そうした中で市民農園は国籍を問わない活動として重宝されているのだ。コミュニティガーデンは多文化共生にも寄与できるのである。

写真1 (左)・2 (右) ドイツ、ミュンヘンのクラインガルデン



(筆者 2015 年 12 月 6 日撮影)

②その他の国の場合

日本でよく知られているドイツの「クラインガルデン」以外にもヨーロッパではほとんどの国に市民農園の制度がある。イギリスでは「アロットメントガーデン」、スウェーデンでは「コロニトレゴード」、オランダでは「フォルクスタイン」、フランスでは「ジャルダンファミリオール」というように、国ごとに国民に親しまれ独自に発展してきた市民農園が存在する。

なお、ドイツ以外のヨーロッパ各国における市民農園利用の目的は国によって大きく異なるのかというと、そうではない。やはり、その市民農園ごとにテーマがあり、健康維持のための場、コミュニティ形成の場、より安全な食の実現の場、リフレッシュの場など、様々な用途で利用されている。この点はアメリカのコミュニティガーデンとほぼ同じであり、国は変われども人々の暮らしや志向に大きな差はないのだと改めて感じられる。その意味では、コミュニティガーデンは今後もあらゆる国に普及する可能性のある活動だとも言えるのではないだろうか。

2-3. 日本における市民農園・コミュニティガーデン

(1)市民農園

日本における初めの市民農園は1924年に京都に開設された分区農園である。これはイギリスのアロットメントガーデンをモデルにしたもので、花を主体に栽培し、地域環境の改善を狙いとしていた。

また、1926年には大阪と東京にドイツのクラインガルデンをモデルにした市民農園が開

設された。これらは緑地の一形式として計画されており、都市空間としての完成度は現在の市民農園より高く、児童遊戯施設が設けられたものまでである。

これらの一部は1947年、8年ころまで存続していたが、戦後は食糧自給という目的で農園利用や自家菜園運動がなされることが主となった。なお、この当時の苦しい自給体験は経験者の記憶に強く残ったため、戦後の市民農園に対するイメージは暗いものとなってしまったという。しかし、戦後の復興と食糧事情の安定化に伴ってこうした自家菜園運動は衰退していった。

1960年代後半になると、都市化に伴う住環境の悪化や余暇時間の増大、食品の安全性への関心の高まり、また、水田の減反政策による余剰農地の発生や農家の就業構造の変化に伴う遊休農地の増加などを背景に、大都市を中心に貸し農園が増加してきた。

そうした中、1970年代には農林水産省が公式に認めたこともあいまって、世の中に「市民農園」という言葉が定着し始めた。

その後、1990年代には「市民農園整備促進法」が制定され、正式にこの制度の適用を受けた農園だけが市民農園と呼ばれるようになった。しかし、法の適用を受けていない貸し農園を表現する適切な言葉がないため、法律の適用を受けていない貸し農園も区別されずに「市民農園」と呼ばれている実態がある。

次第に市民農園は形態を変えたものも登場した。中山間地域の活性化ニーズと都市住民の田舎への憧憬が結びつき、グリーンツーリズムの一環として農村型市民農園と呼ばれる宿泊小屋つきの滞在型市民農園が誕生したり、都市に近い農村地域にやや規模の大きい日帰り農園が開設されたりと、タイプが分かれていった。

(2) コミュニティガーデン

前項で見てきたように、日本ではコミュニティガーデンが広まる以前に「市民農園」があったのだが、1990年代からはアメリカから入って来た「コミュニティガーデン」が広まり始めた。

コミュニティガーデンの活動は全国各地で行なわれているが、ほぼ同義の市民農園活動も含めると数の把握は難しい。正式に市民農園として認定されているものについては農林水産省が公表しているデータがあり、その数は2014年3月時点で全国に4,113であるという。

コミュニティガーデンと呼ぶ活動で早い時期に行なわれた事例には、神奈川県横浜市の都市公園におけるチューリップ球根植え活動（1995年）や、神奈川県川崎市のコミュニティガーデン新川崎（1998年）、大阪府阪南市のコミュニティガーデンぼけっと（1998年）等がある。これらの事例における目的は、それぞれ、高齢者の生きがづくり、国鉄操車場跡地の再生、障がい者福祉であった。これらの目的から、環境悪化への懸念や農地の都合、レジャー需要という背景が主であった市民農園に比べると、コミュニティガーデンは地域課題解決のための活動として実践されてきた傾向があることが分かる。

2-4. 日本と欧米の比較

(1)設備・形態

①土地区分・都市計画との関わり

日本の市民農園は私有地である農地に多いが、ドイツやオランダの市民農園は都市計画のなかに位置付けられているため、公有地に多い。そして、もしも土地利用計画の変更がなされた場合も行政によってきちんと移転先が用意されることになっている。一方、日本では、1991年の生産緑地法改正により農家が農地の利用法を選択する必要が出た際に市民農園が廃園を迫られたということがあった。こうした違いから、市民農園の重要性の捉えられ方の違いが垣間見える。

②区画あたり面積・区画数

区画あたりの面積は日本やアメリカと比べると、ドイツとオランダのそれはけた違いに広い。日本の市民農園の平均区画面積が10～50 m²であるのに対し、ドイツでは300～400 m²である。

また、区画数についても、日本の平均は1農園あたり45区画程度であるのに対し、ドイツでは1つの農園に200を超える区画がある。以下に、実際に筆者がドイツのクラインガルデンを訪れた際に、入り口に掲示されていたクラインガルデンの全体図を載せておく。この全体図には区画に番号が振られているのが分かるが、その番号は250近くまである。1区画300 m²が約250あるということからも想像がつく通り、広大な土地が市民農園にあてがわれているのだ。なお、広大な土地があるからと言って、このクラインガルデンは田舎の何も無いところに設置されているわけではない。ここは国際空港のあるドイツ有数の大都市であるミュンヘン中央駅からトラムで20分少々、都会に程近い場所なのだ。周りは住宅地であるが、クラインガルデンの中からは少し遠くに高層ビルが建っているのが眺める。そうした場所に市民の栽培のための広大な土地が確保されているということは日本では考えられないことではないだろうか。

写真3 ミュンヘンのクラインガルデンの全体図



(筆者 2015 年 12 月 6 日撮影)

③運営主体

運営・管理を担う主体が日本では農家や市町村などの設置者であるのに対し、ヨーロッパでは利用者団体の協会である。そうした利用者組織があることのメリットは、運営主体の負担が軽減されるということである。市民農園の運営には、ルール作りや利用料の徴収、栽培指導、イベントの実施、設備の維持といった様々な仕事があり、それらを個人農家や市町村が行なうのでは負担が大きい。しかし、利用者組織があればそういった仕事が分担して行なわれるため、効率的で行き届いた農園運営が可能となる。

④借用期限

日本は平均 5 年以内であるのに対し、ドイツは 25 年以上、オランダは借りた本人が辞退するまでと、非常に長い期間借りられる仕組みとなっている。その長さは半永久的とも言える。だからこそドイツなどでは各区画で植栽の配置や小屋のデザイン、テーブルや遊具などを個性ある凝ったものにすることができ、利用者がより園芸活動にのめり込むことができるのではないかとと思われる。

⑤設備

日本では、通常は水道が使えるくらいで、滞在型市民農園を除き小屋なども無い。一方、

ドイツやオランダでは小屋や集会所がある上、水道のほかに電気・ガスも使える。また、筆者が見たドイツのミュンヘンのクラインガルデンでは各区分に背の低い門が設けられていた。そうした門をはじめ、各区分内のデザインや物の配置は自由であり、小屋がカラフルにペイントされていたり、ベンチや遊具が置いてあったりと、それぞれの区分に個性が現れていた。さらに、クラインガルデンの敷地内にはレストランもあり、作業の合間に食事ができるようにもなっていた。

(2)活動・利用目的

①地域環境改善

日本と欧米、特にアメリカのコミュニティガーデンで共通しているのは「地域環境改善」という目的である。建物跡地、未利用の公有地、公園敷地内、建物の屋上など、コミュニティガーデンとして利用される土地の属性は様々だが、その土地を緑の空間に変えることでより生活環境を良くしたいという思いがあるのは同じだ。

日本の場合、アメリカのような不況や人権問題を背景とした危機的な荒廃という状態は無かったものの、後の章で取り上げる事例のように、雑草と不法投棄による荒廃や、巨大施設の建設による環境悪化といった状態はあり、それらに対する改善運動としてコミュニティガーデンが取り入れられている。

②コミュニティ形成

「コミュニティ形成」という目的も共通である。アメリカでは当初からコミュニティガーデンは地域の問題を人種の違いを超えて共同で解決するための場として捉えられてきていたし、ヨーロッパでは元々は環境や健康などの目的が主だったが、近年ではドイツで人種間の融和のために活用されている事例も見られた。

日本でも市民農園に関しては環境や余暇などの目的が主であったものの、コミュニティガーデンに関しては住民によるまちづくり活動の一つとして、地域のつながりを強めることを目的として実施されている。

③高齢者の生きがいつくり

「高齢者の生きがいつくり」も共通である。ドイツでは利用者の年齢の下限がある市民農園もあり、高齢者福祉の一環として重視されている。日本においても、高齢者が社会的役割を得ていきいきと活躍できる場として期待されている。

筆者が訪れたドイツのクラインガルデンでも、園芸をしていた高齢者の方がいたのはもちろんだが、複数人で犬の散歩をしていたり、併設のレストランで友人同士集まっていたりしている人々もいた。こうしたことは、クラインガルデンが誰かと集まれる場所であったり、行けば顔見知りがいる場所であったりすることの証ではないかと思う。単に庭で園芸活動をすればいいというわけではなく、園芸活動から広がる人間関係が高齢者の生きがい

となっていると考えられる。

④食糧自給

アメリカのコミュニティガーデンで見られた「生活のための食糧自給」という目的は、現代の日本ではほぼ考えられていないと思われる。これは、筆者の推測に過ぎないが、日本でコミュニティガーデン活動を実践している層はボランティアな地域活動に参加する余裕のある比較的裕福な層であるため、自給を目的にすることは無いと考えられるためだ。また、本論文を執筆するにあたって事例を調べていても、自給目的の活動は発見することができなかった。

ただし、健康への意識が高まる中で、安全な食を求める人々が市民農園を利用して自ら生産活動に取り組むという例であればもちろん存在する。

⑤憩いの空間づくり

「憩いの空間づくり」という目的に関しても、日本と欧米の差は大きいと考えられる。それと言うのも、日本で実現されているコミュニティガーデンは規模の小さなものが多く、小屋やベンチなどが置いてある欧米のコミュニティガーデンのようにのびのびと利用できるとは言えないからだ。日本では、栽培作業や景観に憩いの機能が求められているのが主であり、その場にしばらく滞在して何もしなくても癒されるというレベルまでにはいっていないように考えられる。

⑥健康増進

「健康増進」という目的もまた日本と欧米では差があると思われる。ドイツ等では医者に市民農園を勧められることもあるというほど園芸による健康効果（園芸療法の分野で言われる植物のヒーリング効果）が認知されているが、日本ではあまり認知されていないように思う。おそらく日本では園芸特有の効果ではなく、園芸をする中で身体を動かすことの効果重視されているように思われる。

⑦教育

日本では児童の教育用に市民農園やガーデンが設置されていることはまれだが、アメリカではコミュニティガーデンを通しての食育はもちろん、社会問題や数学、科学、経済学を教えるプログラムを実施しているガーデンもある。また、カナダの大学では学生に土地を貸して、作付けから収穫、販売までを実践させることで経営力を学ばせるというカリキュラムが実践されているという。

(3)社会的な位置付け・定着度

ドイツやオランダの市民農園は、都市計画の中に位置づけられ、都市内の公園・緑地として立派に機能し、レジャー活動、コミュニケーションの場としても存分に活用されてい

る。またそれができるように造られている。それに対して日本は政策上の取り組みや確固たる組織が無く、まだまだ設備の充実度・農園の活用度も及んでいない。

このように、ヨーロッパと日本では市民農園の定着度に大きく差が開いている。日本では何故市民農園が広く定着してこなかったのかということの背景には、日本の市民農園の運営方式に問題があると考えられる。

日本の市民農園は行政が運営主体となっているために公平性を重視して利用期間が短くなっており、そのためになかなか利用者団体の組織化が進まず、地域を越えた大きな動きができなかったのである。また、運営主体が農家個人であったとしても、そちらはそちらで個人同士の土地利用契約でのいざこざや背景の異なる農家と利用者との人間関係の難しさなどが要因となって、利用者の足が遠のいてしまうことがあった。

日本のこうした運営方式に対し、ヨーロッパでは土地は行政から提供され、運営主体は利用者らの組織である。利用期間は日本よりもはるかに長く、利用者は各農園の利用者組織に加入することが義務付けられているため利用者同士の結びつきが強くなっている。また、そうした各農園の利用者組織は自治体単位でまとまり、さらにそれが州単位でまとまり、最終的には全国協会を組織するといった地域を越えた大きな動きがなされている。ヨーロッパでは 1900 年前後から各国にそうした全国レベルの協会がつくられており、その各国の協会が 1926 年に誕生した市民農園国際連盟組織に加入することで、市民農園の発展のための意見交換を行なってきた。

一方、日本において利用者組織による運営が進んだのは 1970 年代からである。それまでは個人の利用者が農園主とのやりとりを行なっており、利用者はほとんど組織化されていなかった。そうした中、1973 年に千葉において「千草台園芸サークル」という利用者組織が管理運営を行なう農家の土地を利用した「斉藤レジャー農園」が誕生した。この農園は 2015 年現在で 40 年以上続く市民農園であり、このような農家と利用者の協力により活動が長く続いてきた事例が知られるようになってきたことで利用者組織による運営方法への関心が高まっている。

また、地域を越えた運動に関しては、市民農園の全国組織である日本市民農園連合が 1989 年に誕生している。そして、日本市民農園連合が市民農園国際連盟組織に加入したのは 2007 年である。ヨーロッパに比べれば遅いスタートであるものの、日本でも市民農園のネットワーク形成が少しずつ前進しているという状況だ。

3章 今宿コミュニティガーデンの事例

3-1. 今宿コミュニティガーデンの成り立ち

(1)基本情報

場所：神奈川県横浜市旭区

設置年：2005年

面積：約600㎡

運営団体：今宿コミュニティガーデン友の会

600㎡のコミュニティガーデンは棚田のように段差が作られており、「芝生のイベントゾーン」、「ハーブゾーン」、「フラワーゾーン」、「学習体験ゾーン」、「果樹ゾーン」、「堆肥マス」に分割されている。それらのゾーンにはサツマイモやサトイモなどの野菜、ダリアやバラなどの花、レモングラスなどのハーブ類、ユズ、シイタケ、稲など多種多様な植物が植えられている。

写真4 今宿コミュニティガーデン全景



(今宿コミュニティガーデン友の会 Web サイト)

(2)設置背景

今宿コミュニティガーデンは神奈川県旭区に位置し、2005年より設置された。きっかけは2004年の秋に行政と住民との協働でまちづくりの検討・実践を行う「まちづくりサロン」において、市有地4か所の活用方法が検討されたことであった。そこで住民が提案したコミュニティガーデンの案が採用され、公募で集まったメンバー数人が中心となって活動を始めた。

対象の土地は、高圧線下の斜面という悪条件のために未利用で放っておかれていた市有地であった。当時は雑草が頭の高さまで生い茂り、ゴミの不法投棄もあってあまり人が寄り付かない場所であった。それを、不法投棄の山を片付けたり葛の根を取ったりして綺麗な状態にした後、荒れた土地でも育ち、収穫してそば打ちイベントもできると、そばを植えた。

その後は植物の種類を増やしながらか「3世代交流」を目的に活動を続けてきており、今年(2015年)時点で既に10年の歴史を持っている。

(3)活動方針・理念

今宿コミュニティガーデンは以下のような理念で活動を行なっている。

コミュニティガーデンを通して、多世代交流の「まちづくり」を目指しています。また、地域住民を中心に「安らぎ、つながり、思いやり、学び」をうみだす場とします。地球温暖化防止対応をはじめとする「エコガーデン」志向です。

(「今宿コミュニティガーデンご案内」プリント)

上の文にもあるが、今宿コミュニティガーデンでは「多(3)世代交流」「顔の見えるまちづくり」を掲げている。隣に住んでいる人の顔も分からないということに危機感を感じたことから、これらをテーマとしたという。

また、初めは「花いっぱいのお癒しの場」「地域との交流の場」を目指して活動していたが、やがて「エコ」や「食育」といったキーワードも意識するようになったという。次第に「エコ」や「食育」をテーマにしたイベントが追加されていき、活動の幅が広がっていった。

3-2. 組織・体制

(1)参加者／参加方法

メンバーは個人会員47名、賛助会員(企業)11社で構成されている。個人会員の男女比は約6:4で男性が多く、年齢層は60代以降が中心となっている。一般的にガーデニング自体は女性が興味を持ちやすい活動だと考えられているが、健康のためにと考えて始める男性も多いという。

特に男性は定年まで地域の人顔も知らずに過ごしてきた人が多いが、ここで初めて地域の同世代の人と出会い、一緒に汗を流しながら他愛のないおしゃべりを楽しんでいる。また、メンバーの担当分野・参加方法は様々であり、区外から参加するメンバー、直接栽培の作業をしなくてもWebサイト作成やカメラを担当するメンバー、イベント時の料理作りで活躍するメンバー、資金や資材に関する協力を行なう賛助会員等、多様な参加方法が認められている。なお、定例活動日は週1回である。

(2)資金面について

補助金を必要とせず自主財源を確保できる事業（花・野菜のポット苗の販売やハーブティー、エコケーキの販売、園芸作業の出前）を実施している。

活動の初期は旭区区民提案型活動事業に応募して3年間補助金を受け取っていたが、その後の運営に関しては会費と自主事業でまかなっている。

(3)行政との関係

行政との関係は、区が今宿コミュニティガーデン友の会に土地を無償で貸し付けているという関係である。活動を始めたばかりの頃は助成金を受け取ることもあったが、現在はそのようなことは無く、自立的で良好な関係を築いている。

3-3. 効果—環境改善と多世代交流の実現—

(1)環境改善

コミュニティガーデンのおかげで、以前は雑草と不法投棄があるばかりで人が寄り付かない荒れた未利用地であったところが、今や居心地のよい場所になった。その快適さは、外回りの営業マンが近くに車を停めて昼寝をするほどだという。活動の初めの年の夏に酷暑の中で不法投棄やガレキ、葛の根を片付けた後、そばまきを行ったところから始まり、段々と花・野菜の種類を増やしてきたことで現在の綺麗なガーデンが出来上がったのである。

そして、このコミュニティガーデンの存在は近隣の美化にもつながり、防犯にも役立っている。荒れている土地をそのままにしておいてはますます荒らされるばかりだが、綺麗に管理されていることで荒らす隙を無くすることができるのである。

(2)地域の結束力の高まり

住民主体でやっているため専門家がおらず、自由にできることが地域の結束を強めている。専門家がないため、活動当初は外部から講師を呼んで勉強会を開催したり、川崎市の宮前コミュニティガーデンを視察しレクチャーを受けたりしたが、その後は元サラリーマンの木村さんを中心に、住民らが自力でコミュニティガーデンを造り上げてきた。その過程での助け合いが地域のつながりを強めてきたということである。

(3)多世代交流の実現・地域との連携

今宿コミュニティガーデンでは、多世代交流を実現する機会として多数のイベントが催されている。以下にその具体例を紹介したい。

①そば打ち

メンバーの中にそば打ちに心得のある人がおり、他団体・地域のそば打ち会や小学校のそばの育成の食育まで引き受けるようになった。

②エコ喫茶

8月に地区センターで開催される「今宿地区サマーフェスタ」にてハーブティーとケーキを振舞う。ハーブティーはコミュニティガーデンで採れたハーブを使用している。

③収穫祭

11月の勤労感謝の日に行なわれる、150人程度が訪れる大きなイベントである。子ども向けのさつまいも堀り体験、親子向けに焼き芋などを催す。このイベントは元々、放課後の学童保育の帰りに必ず顔を出してくれる男の子と女の子の要望に応じて始まったという。2015年の収穫祭は筆者も参加させて頂いたが、家族連れで訪れる人が多く、小さな子供から大人までイベントを楽しんでいた。

④エコ笑こ祭り

「プランターでの堆肥作り講座」や「ソーラーパネルで動くおもちゃ作り教室」、リユース品の販売など、エコを意識した企画を行なうイベントである。また、中途障がい者の工房「アリアーレ」もブースを構え、中途障がい者による手作り小物も販売している

その他の地域連携については、以下のようなものが挙げられる。

- ①子ども会：小学校放課後学童保育と保育園の食育への協力
- ②老人会との共催による「よこはま看護専門学校」の「老年看護」の実習
- ③町内会との連携による生ごみのカラス対策
- ④地域ケアプラザにおける緑のカーテン作りとゴーヤの食育の実習
- ⑤中途障がい者自立支援のための学習ゾーン活用
- ⑥横浜市と旭区による地域の担い手養成講座「あさひみらい塾」への協力

また、その他にも多くの人々が今宿コミュニティガーデンに関わっている。賛助会員である企業11社は年会費の他、資材や知識などの支援をしている。筆者が見学させて頂いた保育園の園児への食育イベントでは、賛助会員のうちの1社である桜井造園土木株式会社の畑を利用していた。こうした賛助会員に対して、今宿コミュニティガーデンからは「友の会たより」を送り、活動の報告を行なっている。

メンバーから広がるつながりも重要である。今宿コミュニティガーデン友の会のメンバーはコミュニティガーデン以外の活動も掛け持ちして行なっているため、人のつながりは自然発生的に広がっているという。実際に筆者がサマーフェスタに参加した際にもメンバーの知り合いが多く訪れてお喋りを楽しんでいた。

また、イベントに参加した子どもが別の機会にまた訪れることもあるという。小さい頃訪れたことをきっかけに、中学校の自由研究の題材にと再訪する子どももいるそうだ。

写真5 保育園の食育行事の様子



(筆者2015年10月14日撮影)

写真6 今宿コミュニティガーデンで採ったハーブを使ったエコケーキ



(筆者2015年8月22日撮影)

(4)生きがいつくり

自分の得意な分野で人を喜ばせることができるということが生きがいにつながっている。何か新しいことを始めるときは、提案者が主役となり、コミュニティガーデンのゾーンが

割り当てられる。そうすると、定例活動日以外にも花の調子を見に行くほど、熱心に取り組むようになるものだという。

また、今宿コミュニティガーデンでは、メンバーの士気の高揚のためにマスコミへの露出やインターネットでの活動の公開を積極的にしている。実際に地元のテレビや新聞などの取材や高齢者向け雑誌への掲載など多くのメディアに取り上げられており、活動の励みになっている。

4章 目黒天空庭園栽培ガーデニングクラブの事例

4-1. 目黒天空庭園の概要・成り立ち

(1)基本情報

場所：東京都目黒区大橋

設置年：2013年

面積：約 60 m²（コミュニティガーデン部分）

運営団体：NPO 大橋エリアマネジメント協議会、目黒天空庭園栽培ガーデニングクラブ

「目黒天空庭園・オーパス夢ひろば」とは、東京都目黒区が首都高速・大橋ジャンクションに開設した庭園である。らせん状に曲がる高速道路の屋根（地上 35m）に約 7000 m²の人工地盤を創出し、約 5000 m³の植栽土を盛り、1000本の樹木、3万株の草花が植えられている。

これは環境負荷低減を狙いコンクリートの壁と屋根でジャンクションを覆うという発想から始まった緑化事業であり、ジャンクションを含めた再開発地区全体が代々木公園など周辺に位置する緑地空間と一体で生態系ネットワークの一部を成すという考え方に基づいている。

この目黒天空庭園・オーパス夢ひろばにおいてコミュニティガーデンとしての機能を持った空間は「コミュニティスペース」と名づけられており、果樹・野菜、つる植物、柑橘類が植栽されている。また、その他にも、花の段々畑がある「四季の庭」や、野の原の景色を演出した「あそびの広場」、信楽焼きの鉢を活用し四阿周辺の伝統的な日本庭園の植栽のある「くつろぎの広場」、かつて目黒でタケノコ栽培が盛んであったことにちなんで竹林を表現した「もてなしの庭」など、多様なコンセプトで作られた庭園や広場が設置されている。

写真7 「目黒天空庭園・オーパス夢ひろば」と庭園につながっている2つの再開発マンション「クロスエアタワー」、「プリズムタワー」



（出典東京都）

写真 8 目黒天空庭園のコミュニティスペースを利用したコミュニティガーデンの全景



(筆者 2015 年 10 月 10 日撮影)

(2)設置背景

①公園全体に関して

設置のきっかけはジャンクション建設である。ジャンクション建設により環境悪化が引き起こされることが懸念された上、地域の分断と商店街の消滅が起これ、街を守ろうとする住民が立ち上がって目黒区・首都高速道路株式会社（当時の首都高速道路公団）とともにジャンクションの屋上に公園を完成させた。

ジャンクション自体の計画は 1990 年に決定され、住民団体と目黒区・首都高速道路株式会社との長い協議を経て 2013 年に完成した。その時の住民団体は最終的に 2012 年に NPO 法人化し、現在は「NPO 大橋エリアマネジメント協議会」となっている。そして、この「NPO 大橋エリアマネジメント協議会」がコミュニティガーデンを運営する「栽培ガーデニングクラブ」含む公園の活動団体 3 つを統括している。

以下が「NPO 大橋エリアマネジメント協議会」の経緯と実績である。

2006. 9～2007. 3 「平成 18 年度全国都市再生調査事業」を実施し、地元住民による公園の管理・運営を検討した。

2006. 9～2009. 5 「オープンスペース検討会」をジャンクション屋上等のオープンスペースの利用・活用を検討する場として設置した。

2007. 3～ 「大橋を語る会」をオープンスペース検討会の成果をベースに、再開」発地区周辺の住民の方と大橋の街を語る場として設置した。過去 6 回開催。

2008. 3～ 「目黒川桜祭り」への参加。毎年開催している目黒川桜祭りに参加し、

再開発・ジャンクション公園計画を紹介した。

2008. 9～ 街の応援歌制作・販売。地元住民による作詞・作曲にて、応援歌「動き出す街大橋」を制作・販売した。
2009. 6～2010. 3 「エリアマネジメント準備会」を、エリアマネジメントを実現する為に設置し、組織立ち上げの検討・準備を行った。
2009. 12～ 「大橋グリーンクラブ」を設立。目黒区のグリーンクラブ制度を活用し、目黒川緑道の花壇花植えを実施した。
2010. 3～ 「大橋エリアマネジメント協議会」を設置し、活動を始めた。
(NPO 大橋エリアマネジメント協議会 web サイト)

この年表以前の1995年7月には有志による「大橋一丁目街づくり研究会」が発足し、大橋ジャンクションと共存できる街づくりをめざした検討を行なうと共に会員の拡大にも積極的に取り組んでいった。その後研究会は、事業の具体化に伴い、2000年1月に「大橋一丁目地区再開発準備会」、2002年4月に「大橋一丁目地区再開発協議会」と組織を改変し今日に至っている。

さらに、2007年には「大橋を語る会」の設置と街の応援歌の作成がなされた。権利者組織の枠を超えて周辺住民も参加した新たな街の運営組織を目指して立ち上げられたのが、「大橋を語る会」である。なお、この会に参加した人の中には、現在のNPOの理事になる人もおり、意見交換のみならず人材発掘の有効な機会となった。

そして、この活動の一環として出てきたのが街の歌を作る試みである。地元住民である作詞家・作曲家の協力を得て歌を作成している。歌を多くの人に聴いてもらうことで大橋の街づくりに関心を持ってもらうことを目的にしているのだという。

また、街のシンボルマークや再開発が行なわれた街の総称も住民の意見を取り入れて決定された。

②コミュニティガーデンガーデンスペースに関して

コミュニティガーデンとして使われているスペースは、「コミュニティスペース」と名づけられており、利用方法は住民に任されていた。検討当初は花畑くらいに考えていたが、野菜なども栽培しようということになった。目黒区からの要請もあり畑は公共性を意識したものとする事に決まり、今のようなコミュニティガーデンができた。

(3)活動方針・理念

目黒天空庭園栽培ガーデニングクラブの理念は以下の通りである。

都市公園において自然の生態系と人の生活との融合を目指す団体であり、以下の事業を行

なう。

- ・ 目黒天空庭園で自然の生態系を活かした栽培活動
- ・ 人の生活を向上させる緑園空間作り
- ・ 地域貢献となるボランティア活動
- ・ 上記に関連する普及・啓発等の活動

(「目黒天空庭園栽培・オーパス夢ひろば活動団体」プリント)

これを踏まえて、ヒアリングを通して明らかになった、目黒天空庭園栽培ガーデニングクラブの方針について述べていきたい。

①喜んでもらえる畑づくり

区立の公園内という設置場所柄、公共性を意識したコミュニティガーデン作りが行なわれている。具体的には、公園を訪れた人が見て楽しめるよう、手間がかかっても色々な種類の花や野菜を植えているという。

②都市の住民ができない土いじりの場を提供

高層マンションが建ち、高速道路が走る地域において、土いじりができる貴重な場所を地域の人々に提供している。実際に子どもに土いじりをさせたいと考える親は多く、収穫体験イベントには応募が殺到するという。

③オリジナリティあるまちづくり：ワインづくり

広場の検討中にたまたまブドウを育てたいという話が浮上したところ、ブドウは日当たりのよさが必要で乾燥に強く、ジャンクションの環境にちょうど良いと採用されたという。さらにそこから、協議会のメンバーから「ここにブドウを植えてワインを作れば後世に残せる」というアイデアが持ち上がった。その提案は共感を集め、実行に移されることとなった。偶然にも同協議会には農業や造園に詳しい理事がいたため、その縁で山梨の白百合醸造に話が持ちかけられた。その後白百合醸造の社長の協力を受け、約3年がかりで山梨でブドウの苗木を育て、目黒天空庭園に移植することとなったという。

そのような経緯でつくられるようになったワインは「天空庭園」と名づけられ、毎年11月に行なう収穫祭というイベントで販売されている。

このワインをつくる活動により、2つの効果が現れた。

1つ目は、地域のシンボルができたということだ。ワインのラベルやグラスはメンバーがデザインしているが、毎年デザインが変わっている。筆者が収穫祭に参加した際に来場者に話を聞いたところ、毎年のグラスをコレクションしているという人もいた。今年度で3年目となる活動だが、すでに恒例のものとして定着している。

2つ目は、活動に違うセグメントを呼び込めたということだ。すなわち、比較的若い人や男性などだ。地域活動はどうしても時間のある高齢者や、女性が多くなりがちだが、こう

した工夫があることでより多様な層の参加が得られる。

写真9 「天空庭園」のラベルが貼られたワイン



(筆者 2015年11月14日撮影)

写真10 収穫体験に参加する子どもたち



(筆者 2015年11月14日撮影)

4-2. 組織・体制

(1)参加者／参加方法

メンバーは56名おり、7:3で女性が多く、年齢層は30代～80代後半と幅広い。たまに親子連れで小さな子どもも参加している。メンバーの背景は、昔からこの地域に住んでい

る人、タワーマンションの新住民、区外から来ている人など多岐に渡っている。
参加方法に関しては月 2 回土曜日に行なわれている栽培作業に参加することが中心となっている。普段の栽培作業の参加率は 5 割ほどであり、収穫祭ではもう少し人数が増えるという。

(2)資金面について

目黒区から受託している公園の維持管理に関しては区から資金が出ているが、その他の活動の資金は年会費とイベントの収入でまかなっているという。なお、収穫祭では収穫したハーブが入ったソーセージ、じゃがもち、トウガラシのブーケ、ワインなどを売っている。

(3)行政との関係について

目黒区がエリアマネジメント協議会に公園の維持管理を委託しているという関係である。そうした関係はあるが、維持管理や行事などの活動に関して行政はあまり口出しをせず、2・3ヶ月に1回の活動調整会における話し合いを行なう程度であるという。収穫祭等の行事に対して行政からの補助金もない。

(4)企業との関係

①東急電鉄との連携：「みど*リンク」アクション

『みど*リンク』アクションとは、東急電鉄が行なっている住民活動支援の企画である。地域と東急電鉄がリンクすることでみどり溢れる豊かな沿線をつくろうという趣旨であり、沿線で活動する住民グループに緑化活動の企画を募り、審査を通った企画に対して物品等での支援を行なっている。

なお、目黒天空庭園栽培ガーデニングクラブの特徴的な活動であるブドウ栽培が実現したのはこの企画があったからだという。初めはブドウではなく藤棚にする予定であったことから、予算の問題で実現が危うかったが、この企画の審査に通ったおかげで、ブドウの苗を手に入れることができたという経緯がある。

また、2015年度は苗床・ストックヤード設備等の支給を通して、目黒天空庭園が有機栽培のための堆肥づくりを行なうのを支援している。

②白百合醸造株式会社との連携

山梨県甲州市勝沼にある醸造会社であり、目黒天空庭園とワインづくりでの連携を行なっている。栽培ガーデニングクラブのメンバーの中に知り合いがいたことをきっかけに関わるようになり、ブドウの苗木を提供したり、ワインづくりの際に足りない分のブドウを提供したりしている。

栽培ガーデニングクラブのメンバーが山梨のワイナリーまでブドウを運んで仕込みの作

業を体験したり、白百合醸造の方が目黒の収穫祭に訪れたり、相互に行き来がある。

4-3. 効果—環境悪化の阻止とコミュニティ再構成—

(1)環境悪化の阻止

住民らが声をあげ、ジャンクションの設計から利用方法にまで関わっていった結果、地域にもたらされる悪影響を小さなものにすることができた。元々はジャンクションという巨大なコンクリートの塊が目黒・大橋地域の環境に大きな損失を与えることが懸念されていたが、そのジャンクションの屋上を緑で覆うという発想を実現したことで、地域に緑を増やすことに成功した。住民らが自分たちの街を守ろうと立ち上がった成果が目黒天空庭園なのである。

(2)コミュニティ再構成

街を分断することで地域に大打撃を与えるところであったジャンクション建設だが、そこを公園・コミュニティガーデンとしたことで、住民は一つの場所に集まれるようになり、新たなコミュニティ活動も生まれた。今ではジャンクションに併設して建設された新しいタワーマンションに入居する新住民と旧住民の交流の場としても機能している。ジャンクション建設による環境悪化に加え、従来のコミュニティの分断、更には新マンション建設による新しい住民の流入という3つもの大きな課題を突きつけられた大橋地域であったが、目黒天空庭園を活用することで積極的にそれらの課題に取り組んでいる。

コミュニティ再構成のためには地域住民同士が交流する機会が必要であるが、目黒天空庭園栽培ガーデニングクラブが重視している機会は秋に行なわれる収穫祭という行事である。収穫祭の主な目的はワインを初めとする収穫物を地域の人々に振舞うことであり、ワイン以外には、じゃがもちやソーセージ、野菜スープなどを販売している。

また、この行事は地域の人にガーデンを開放する機会であり、普段目黒天空庭園の存在に気づかない人にジャンクションの屋上にある庭園の存在を知らせる良い機会でもある。昨年までは屋上という場所柄、偶然見かけて立ち寄ることが期待できず、元から知っている・関心のある人しか呼び込めなかったが、今後はもっと広報活動をして多くの人を呼びたいということであった。2015年の収穫祭当日はあいにくの雨であったが、親子連れをはじめ多くの人を訪れた。子ども収穫体験では、幼稚園生くらいの約10人の子どもたちが大根とサツマイモを掘ることを楽しんだ。土を掘るのに夢中な男の子や、土の中から現れた虫におびえる女の子など、収穫体験はたしかに子どもたちが自然を学ぶ貴重な機会となっていた。

(3)ワインづくりによる輪の広がり

栽培ガーデニングクラブでは、野菜や花のみならずブドウも栽培している。このブドウ

を利用してワインをつくることで比較的若い人や男性など、違う層を呼び込むことができた。メンバーの中には、ワインが好きでこの活動内容が面白そうなので家は近くないが参加することにしたという人もおり、この活動が多様なメンバーを集めることに役立っていることが伺える。

また、ワイン作りにより山梨の醸造会社や、地域の飲食店との連携も生まれ、輪が広がっている。

(4)公園内外の美化促進

①公園内

コミュニティガーデンがあることで公園内が美しく快適な環境となる。それにより、公園を利用する人々（一般の人、公園内のスポーツの団体に所属する 2000 人、同じく公園内で活動するドッククラブに登録している 2000 人以上の人々）の公園利用促進に寄与している。

②公園外

栽培ガーデニングクラブが公園周辺で美化活動を行なっていると知られることで、近隣におけるポイ捨てなどの抑止効果が見られた。これにより公園だけでなく大橋エリアの美化が進んだ。

なお、この公園外での美化効果は予期していなかった分、NPO 大橋エリアマネジメントのメンバーにとっても嬉しい発見だったという。

4-4. 目黒天空庭園におけるガーデンと今宿コミュニティガーデンの比較と考察

本章で扱った目黒天空庭園と 3 章で扱った今宿コミュニティガーデンとの比較を通して、コミュニティガーデンが地域にどのような影響を与えるのかということや、コミュニティガーデンの性質と地域の背景との関連性、コミュニティガーデン活動全体の課題と展望について考察していきたい。

(1)二つの事例に共通すること

①公共空間を利用した、住民のための場づくり

今宿コミュニティガーデンと目黒天空庭園のガーデンに共通する点として、活動の場が公共空間でありながらも、場の設計や日常の管理が住民主体で行なわれているという点がある。管理が住民の手にゆだねられていることで、一般的な行政管理の公園よりも「住民のための場」として関心が持たれ、活発な運営がなされるのである。

一般的に、公共空間の多くは皆のためのものというより、だれからも文句が出ないよう

に管理される空間になっていることが多い。「皆」の場所が、特定の人々によって占拠されたり、利益を生んだりしては不公平になるという論理はよく分かる。

しかし現実には、その論理が先行するあまり、本来の「皆のため」が「誰のためでもない」だけでなく、結果として無関心な場所になり、場合によっては破壊の対象や危険な環境になってしまうことは例を挙げるまでもなく多々見受けられる。（橋本、2006、p.118）

なるほど確かに、身近でありながらも下手に近づけない存在である従来の公園は、住民の関心を集めにくいと思われる。

このことに関しては、コミュニティガーデンはまさに住民による住民のための活動であるため、土地自体は公共のものであったとしても住民の場として親しまれることとなる。実際に、目黒天空庭園では住民が公園の設計段階から関わっているため、住民に親しまれるための様々な要素が盛り込まれている。具体的には、栽培活動ができるコミュニティスペースや集会スペースの設置、バリアフリー設計、高い場所に位置する公園であることから周辺へのプライバシーの配慮、風の影響による土ぼこりや枝木の落下への対策等、住民が安心して利用するための工夫がなされている。また、デザインの側面からも工夫がなされており、公園内に富士見台をつくったり、松や桜などの植栽や信楽焼の陶製品などを設置したりすることで和の文化が感じられるようになっている。こうしたデザインにしたことには、ジャンクションの屋上を使った公園ということに対する世界からの注目を活かして、地域の人々だけでなく日本全国や世界に日本文化を発信するという狙いも含まれている。以上のような工夫があることで、住民は公園を安心して使うことができるだけでなく、誇りや愛着を持つことができるようになっているのである。

また、今宿コミュニティガーデンでは造成の段階から住民の手でなされており、どのようなスペースをどれだけとるかというゾーニングについては住民らがワークショップを行って決定した。土地が風の強い高圧線下の南斜面地であったことから、段差を作り棚田のようにする必要があったが、その検討には1年という長い期間がかかったという。実際に造成の作業を行なう中では、ショベルカーを使用して土を掘り起こす等、人力では手に負えないような作業もあった。また、最終的には当初計画していたビオトープの実現が叶わなかったなどの苦労もあったという。これらを住民らが自力で行なったことにはかなりの苦労の過程があったと想像されるが、そうした過程がまた「自分たちの場」としてのコミュニティガーデンへの愛着を強めることになったのではないかと思われる。

そのようにして造られたコミュニティガーデンは完成後も住民によってきちんと利用され、気かけられることとなる。住民自身が自由にいじって良いということもあり、関心が保たれるのである。こうした状態なら、現在の公園のように放置されて治安の悪い場所になってしまうということは起こらないだろう。

コミュニティガーデンが住民らにとって自分たちの場所となり、大切にされるためには、住民ら自身でつくるということが重要なのである。

②地域に開かれた行事

両コミュニティガーデンともに、行事の際には地域に向けてコミュニティガーデンを開放し、メンバー以外の地域住民との交流を行なっている。

栽培という私的な活動内容のために、ともすれば閉鎖的なコミュニティになる恐れのあるコミュニティガーデンだが、行事等で地域とつながりを持つことでそのような恐れはなくなる。また、行事は占有利用者と見られがちなコミュニティガーデンのメンバーに対する一般の公園利用者や近隣住民の理解を得られる機会でもある。

また、こうした行事により、コミュニティガーデンの存在が地域に定着する効果があるのはもちろん、普段は参加者になることが難しい子どもや働き世代の男性等との交流が図れるという利点がある。

また、開催する側にとっても行事はメンバー同士の絆が深まる良い機会であり、メンバーの新たな特技を発見するきっかけともなる。今宿コミュニティガーデンでは春・夏・秋の大きな行事を始め多くのイベントがあるが、それぞれのイベントで少しずつ違うメンバーが特技を発揮しているようであった。例えば、夏の地区センターでエコ喫茶を開いた際にはケーキ作りの得意な人や自営業でカフェをやっている人が活躍し、秋の収穫祭ではサツマイモのツルで小物づくりをするのが得意な人や、炭で大量の焼き芋を焼く男性陣が活躍していた。このように、行事が多くあることは各メンバーが活躍できる機会が多いということでもあり、活動の一層のやりがいにつながる。目黒天空庭園の方では秋の行事がメインであり、その中でやはり料理や小物づくりで活躍している人を見ることができた。目黒天空庭園は区立の公園であるため頻繁に行事を行なうのは難しいかもしれないが、今後は年数を重ねるうちに行事が増え、多様なメンバーの背景を活かした企画により活動が盛り上がっていくことを期待したい。

③若い世代の定着の難しさ

今宿ではメンバーの高齢化による後継者不足が課題である。設立から10年以上たつという歴史あるコミュニティガーデンであるため、メンバーの高齢化はやむを得ない。しかし、せっかくここまで続いたコミュニティガーデンが今後も続いていくためにはやはり若いメンバーの参加が必要である。

また、目黒天空庭園の方でも若い人が多いとは言えない。今宿コミュニティガーデンよりは目黒天空庭園の方が平均年齢は若いのではないかという印象を持ったが、やはり中年以上の方が中心のようである。

ちなみに、横浜市旭区と目黒区の高齢者割合は以下の通りである。

横浜市旭区 区別総人口に占める高齢者割合 27.8%

目黒区 総人口に占める高齢者割合 20.0%

(横浜市「横浜市の人口 ～平成 26 年中の人口動態と平成 27 年 1 月 1 日現在の年齢別人口～」、目黒区「年齢別人口表 (統計) 平成 27 年度 (2015)」)

この数字から考えられることは、旭区の方が高齢者割合が高く若い人が少ない分、若い世代が集まりにくいのかかもしれないということだ。しかし、どちらかと言えば若い人が多いはずの目黒区でもそれほど若いメンバーがいないということは、単純に比率の問題ではないということである。

それでは、若い世代がコミュニティガーデン活動にあまり参加しない理由は何であるのだろうか。1つの理由として考えられるのは、時間的余裕がないということだ。コミュニティガーデンの場合はグループで分担してやるとはいえ、園芸・栽培は手間がかかる活動である。こまめに様子を見ないと枯らしてしまうかもしれない。

実際に、どちらのコミュニティガーデンでも真夏の日差しの厳しい日や天候が荒れる日には近くに住んでいる人が心配して様子を見に行くことがあると聞き、定例活動日以外にも植物の世話をする必要があるのでと教えられた。そのようなイレギュラーな事態になったとき、なかなか仕事があると対応できないのだろう。

また、若い世代が参加しない理由はもちろん他にも多くのものであるだろうが、単純に緑に対する興味が無いということも考えられる。元々緑の少ない都会で育った若い世代は、緑に関心を持ちにくいのかかもしれない。

④近所への配慮

今宿コミュニティガーデンでは、イベント時には事前に近隣住民もとに出向いて騒音に関する説明を行なうという配慮をしている。これは、イベントの認知度が高まるにつれて人や車の出入りも多くなり、近隣住民から騒音の苦情が起こったためだ。

また、目黒天空庭園においても、認知度が高まるにつれて取材やイベント利用の依頼が増えたが、商業的な目的での利用は近隣住民に迷惑が掛かるとして、固く断っているという。

コミュニティガーデンが近隣住民の理解を得て定着するためにはこのような配慮も必要だということが分かる。

(2)2つの事例で相違すること

①参加状態・受け入れ状態に関して

目黒天空庭園では人数に関して受け皿不足状態であるという。コミュニティガーデンのスペースが約 60 m²と限られているために、せつかく入会希望者が増えても受け入れきれていないという現状がある。イベント時の子供向け収穫体験においても参加者は 10 名ほどしか受け入れることができず、主催者と参加者はお互い、参加したくても参加できない、参

加して欲しくても参加させられないというジレンマを抱えている。

なお、この状況を改善するのは難しく、ニーズがあるからといって区立の公園であるため畑の面積や公園の利用方法を変更することはできないという事情がある。そのような物理的な制限があるため仕方が無いものの、限定的な活動にならないよう何かしらの解決策が必要である。

一方で、今宿コミュニティガーデンでは活動のメンバーがなかなか拡大していかない状況だという。本来メンバーは47人いるが、実際に作業に出てくるのは1~2割ほどであるとのことだ。年に1回ある総会などには3~4割ほどが参加するものの、やはり労力の必要な作業に関しては参加率が良くない。区外から参加しているメンバーもいるため、頻繁に活動に参加する人は限られてしまう。コミュニティガーデンがある程度続くためには、有償ボランティアとする・土地をもっと利用して畑で作ったものを売って研修旅行の費用とするなど、何かしらご褒美が必要ではないかという話もあった。ただし、こうした悩みは無償で行なう地域活動にはつきものであり、コミュニティガーデンに限らず活動のモチベーションの保ち方が難しいということだろう。各人の目的や楽しみ、すなわちコミュニティガーデンで言えば栽培が好き、仲間とわいわいやるのが好き、地域の環境を良くしたい等の何かが保たれることが必要である。

②みどりの希求度

目黒天空庭園では入会希望者を受け入れられないほど園芸活動に参加したいと思っている人が多いということだったが、今宿ではむしろ人手不足気味であった。同じような活動でも、地域によって住民の関心度合いは異なるということの表れだが、その違いは何が原因となっているのだろうか。

可能性の一つは、その地域の緑の豊富さである。ここで、緑被率という指標を参照したい。緑被率とは対象面積のうち樹木や芝生など緑に覆われた部分を示す比率であり、緑の多さを示す指標として利用されている。その緑被率は目黒区と横浜市旭区においては以下の割合となっている。

目黒区：17%（2003年度）

横浜市旭区：36%（2009年度）

（目黒区「みどりの実態調査（平成26年度）」、横浜市統計ポータルサイト「旭区 公園・緑地」）

このように、割合に倍ほどの違いがあることから、目黒区民の方が緑を求めている人が多いのかもしれないと考えられる。実際に筆者が2つのコミュニティガーデンの周辺を歩いていても、今宿コミュニティガーデン周辺では庭付きの一戸建ての家が主であった一方、目黒ではマンションが中心であった。

コミュニティガーデンをこれから設置する場合には、こうした地域のニーズを確かめる必要があるようだ。

③ 囲いについて

目黒天空庭園ではごく低い囲いが設置されているが、それはほとんど囲いと思わないレベルのものであり、畑にかなり近づくことができる。そのため、公園に散歩に訪れた人がどんな野菜が植えられているのかを覗き込んで楽しむことが可能である。しかし、それでは誰か心無い人に荒らされたりはしないのだろうかと心配になる。その点については、公園に管理人がおり、定期的に巡回しているためそれほど心配は無いという。ただ、やはり、たまに生っているトマトを持っていかれてしまうといったことはあるようだ。ブドウのほうは柵を高くすることで外部の人にいじられることを防止している。

一方、今宿コミュニティガーデンでは高いフェンスの囲いがある。外側からはたくさんの花が咲き誇っているのが見えるものの、フェンスがあるため近づくことはやはり難しい。コミュニティガーデンのメンバー側としては、本当はいつでも誰でも使える場としていきたいと考えており、フェンスを取り除きたいそうだが、フェンスは行政の持ち物であるため撤去するのも簡単ではないのだという。また、フェンスがあったとしても鍵をかけずに解放できればよいのだが、保管してある園芸の道具などを盗まれる心配もありかけたままにしているとのことだ。

(3) コミュニティガーデン活動全体の課題

ここでは、これまでの文献調査と実際の活動事例の調査から筆者が気付き・考えたコミュニティガーデン活動の課題について述べていきたい。

① 専門性の高さ

専門性が高いことがコミュニティガーデンを始めとする栽培活動の定着の難易度を高めている。それというのも、栽培活動の成果が現れるのは1年に1回の収穫時であり、その1回に失敗してしまうとモチベーションを保つのが大変なのである。本当に栽培活動に興味を持てる人でないと、根気のいる作業を継続するのは難しい。

そうした難点がある活動であることから、リーダーの存在も重要である。リーダーは収穫という成果に向けて責任を背負う必要がある上、メンバーが根気強く作業を続けるために夢を見せることができなければならない。

2章のアメリカの事例で触れたように、住民グループにガーデニングを指導するNPO団体等が設立されていれば良いが、そのような団体が無い今の日本においては、栽培成功は各住民グループの努力や構成員の背景によるところが大きい。今後、コミュニティガーデンがもっと普及し、コミュニティガーデン同士の交流が盛んになっていけば、相互に栽培知識をアドバイスし合うことで活動の負担は減っていくのではないかと考えられる。

②コミュニティの閉鎖性について

閉鎖性というのは、コミュニティを語るときにどうしても考えなければならないテーマである。コミュニティの性質として、成員同士の関係が深まるほど閉鎖的になりがちで、外部の人間が入りづらくなるというものがある。

公開性と共通の絆は相反しがちである。誰もが参加できるということは共通の絆を緩めていき、閉ざされたコミュニティでの共通の絆は強い。

公開性を持ちながら共通の絆をもつコミュニティは、どのように形成されてくるか、が問われなければならない。 (坪郷、2003、p. 8)

コミュニティが地域の理解を得るためには、この公開性が鍵になってくる。特にコミュニティガーデンという活動の場合は、野菜や花という収穫物があるため、ともすれば外部からは「コミュニティの成員だけで野菜を採って楽しんでいるのではないか」という風に思われやすい。実際に、もしも1つのコミュニティが場所や収穫物を独占した場合には、それはもはやコミュニティガーデンではなく単なる庭の拡張に過ぎなくなってしまう。

本稿で扱った2つのコミュニティガーデンは開かれたコミュニティであろうとしており、意識的に地域に開放する機会を作っているため、決して閉鎖的ではない。ただし、畑の面積やフェンスなど物理的な要因でコミュニティガーデンへの参加や利用が阻まれることがあるのも事実だ。コミュニティガーデンが地域に定着し、長く続いていくためにもこうした点を外部の人々に誤解されないように気をつけなければならない。

ただし、考え方によっては、この閉鎖性は公園などの公的な場所の維持管理の際に問題として挙がるフリーライダー問題の対策になる可能性もあることを指摘しておきたい。フリーライダー問題とは、公園の維持管理に参加しない公園利用者が町内会・自治会等を中心とする住民の維持管理活動での労力にフリーライドしているというものである。これによって維持管理者側には不満が生まれるが、公園は法律で定められた公の空間であり、排除性の無い空間であることが原則であるため、住民が維持管理者であることを理由に利用者を制限することはできない。

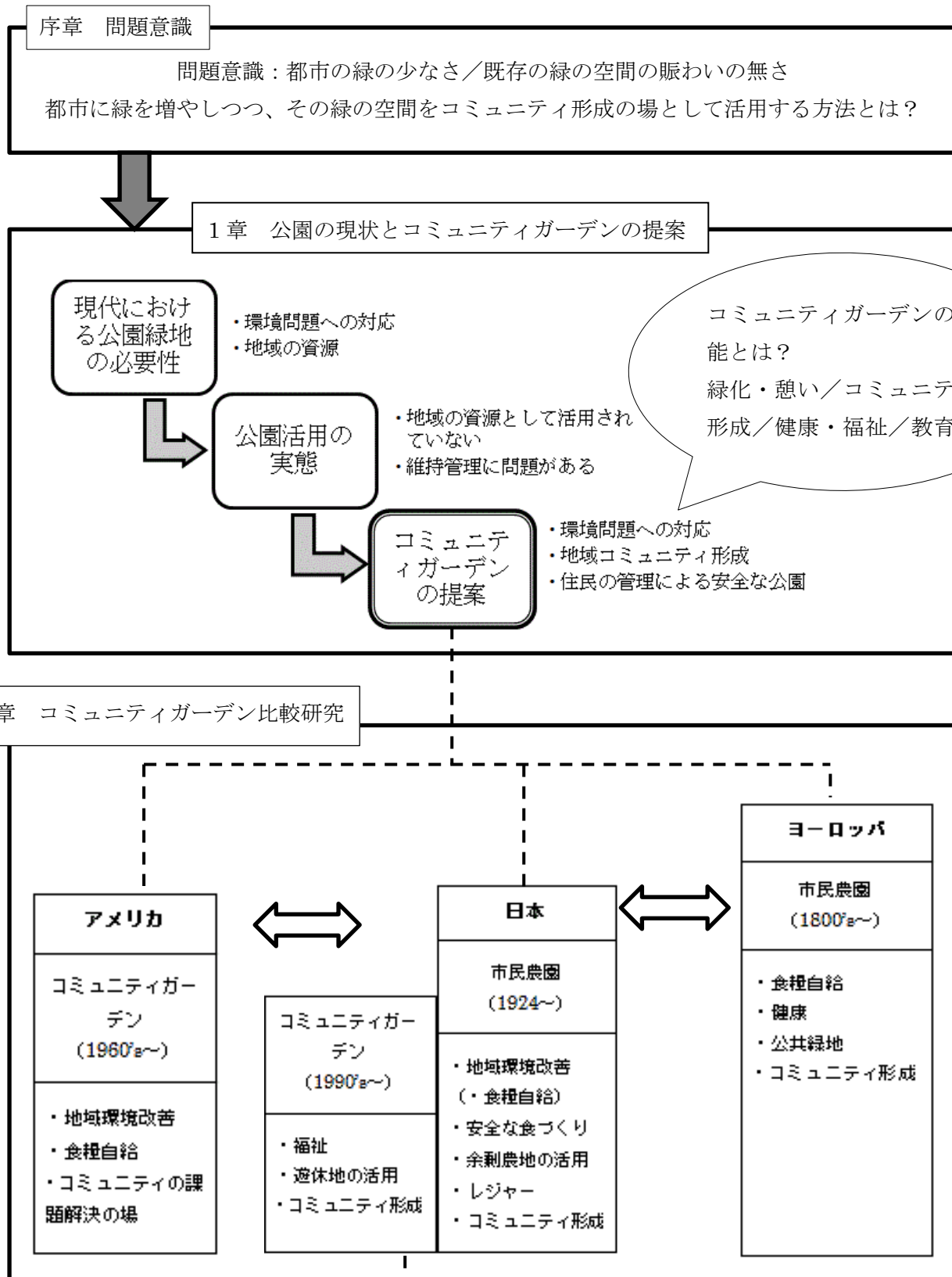
それでは、維持管理者の不満感を解消するためにどうしたら良いのかということについては、やはり利用者参加型の維持管理活動が行なわれることが必要である。利用者参加型の維持管理活動により、維持管理の負担を利用者で平等にすることができれば理想的だ。そこで、コミュニティガーデンを利用者参加型の維持管理活動という観点から見ると、あらゆる利用者に開放されている公園とは異なり、イベント時を除いては利用者がグループの所属者に限られるコミュニティガーデンでは維持管理者と利用者はイコールになる。もちろん、常時あらゆる人に開放しているコミュニティガーデンにはこれは当てはまらないが、本論文で扱った今宿コミュニティガーデンのような事例には当てはまっている。

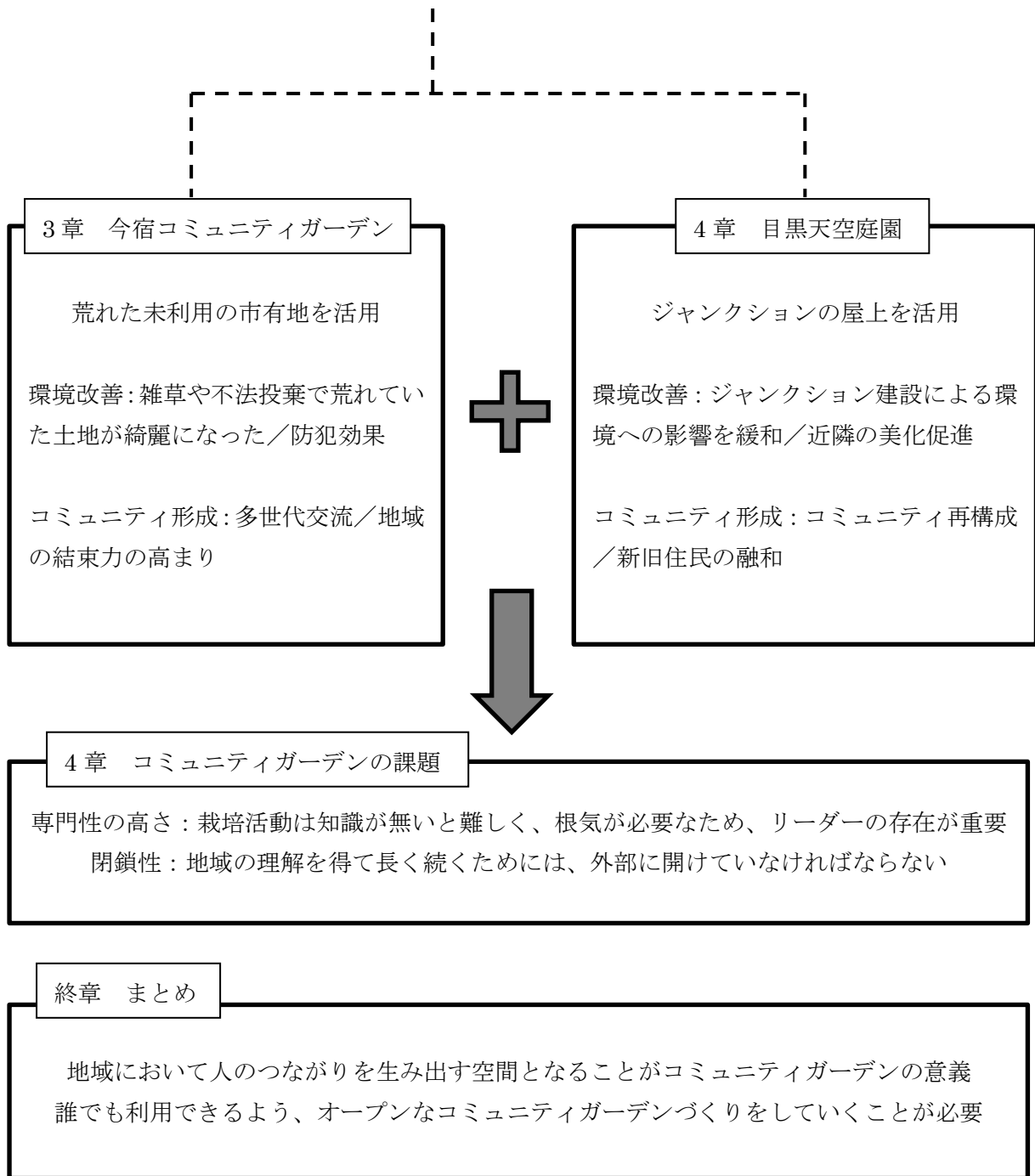
また、コミュニティガーデンは住民自身が責任を持つ場であることが前提であり、自主的に楽しく行なう活動であるため、場を綺麗に保つために労力をかけることに不満を抱くことも少ないはずである。このように、利用者と維持管理者が一致する自主的な活動であるコミュニティガーデンはフリーサイダー問題の対処法となる可能性がある。

そうした可能性があるように、あくまで公共性を重視するのか、それとも労力の公平性を重視するのかということについては難しい選択である。しかし、コミュニティガーデンを通じて地域の共有空間を有効利用し、環境改善とコミュニティ形成を実現しようとするならば、やはり外部の人々にも開放して憩いの緑空間として利用され、住民同士の交流が生まれるようにしていかなければならない。地域のより幅広い層をコミュニティガーデンに巻き込んでいけるよう、各種イベントをはじめとし、普段の利用方法などを含めていかに外部に対してオープンなコミュニティガーデンづくりをするかが重要である。

終章 まとめ

5-1. 論文全体の流れ





5-2. 論文のまとめ

本論文は筆者が持っている問題意識である「都心において身近な緑の空間が少ない」、「既存の緑の空間（主に公園）が人で賑わっていない」という 2 点から出発した。そして、それらの問題を解決する方法の一つとしてコミュニティガーデンを提示したいということが執筆の意図であった。

1 章では、まず、公園を活用すべきだという主張を裏付けるために公園の必要性について述べた。ここでは、環境的な視点だけではなく地域コミュニティ形成の視点から公園の必要性を説いた。

その後、公園利用の現状についての客観的なデータを参照しながら、現代社会において公園が果たすべき役割と現状の公園が実際に果たしている役割に落差があることを指摘した。そして、その落差を埋めるための方法としてコミュニティガーデンを提案した。ここでは、コミュニティガーデンの定義や機能について詳しく見ていった。

2 章では、提案したコミュニティガーデンとはどのような活動であるのかについて、アメリカとヨーロッパにおける歴史・事例と日本における歴史・事例を比較しながら明らかにした。

ここで歴史を追ったことにより、コミュニティガーデンは時代によって様々な目的を持って行なわれてきた活動であり、緑の創造とコミュニティ形成以外にも様々な目的を持って活用されてきたということが分かった。そして、特にアメリカと日本では地域の課題解決の場としてコミュニティガーデンが捉えられてきたということが確認できた。

3 章では、実際の事例として神奈川県横浜市にある今宿コミュニティガーデンを取り上げた。荒れた未利用地をコミュニティガーデンにしたことで地域の環境がどのように改善されたのか、また、地域コミュニティ形成の場としてコミュニティガーデンがどのように活用されているのかということについて実態を明らかにした。

環境改善の側面からは、不法投棄が無くなって憩いの緑空間になったことはもちろん、防犯にも役立っているという効果が見られた。そして、地域コミュニティ形成の側面からは、各種イベントや地域の団体・施設との連携の場としてコミュニティガーデンを活用することで多世代交流を生み出すことができたことに注目した。また、そうした外部との連携はありつつも、初期の造成から現在の維持管理まで住民らが自力で行なっていることや、経済的にも自立していることが今宿コミュニティガーデンの運営体制の特徴であることが分かった。

次の 4 章でも、実際の事例として目黒天空庭園のコミュニティガーデンを取り上げた。こちらは、ジャンクション建設による地域の環境悪化に対してコミュニティガーデンを含む公園づくりという画期的な取り組みがなされた事例であった。この取り組みは住民と行政・企業の協働によるものであり、その過程について住民団体の活動経緯を追いながら詳しく見ていった。

目黒天空庭園のコミュニティガーデンが地域にもたらした効果として、まず地域環境改

善の側面からは、緑空間の確保・公園内外の美化があった。また、地域コミュニティ形成の側面からは、分断されたコミュニティの再構成、新住民との融和の場の創出という効果が見られた。すなわち、ジャンクションにより行き来ができなくなってしまった人々同士が再び集まれるところがあった上、コミュニティガーデンの活動を通じて新旧の住民のつながりができたということであった。

さらに、特徴的な活動としてワインづくりの試みがあり、この活動によって地域独自の文化と地域への愛着が生み出されている様子についても見ることができた。

これらの今宿コミュニティガーデンと目黒天空庭園の2つの事例は、住民による積極的な活動が地域の環境改善を実現し、住民同士の交流の拠点となる場所を生み出したということを表す事例である。今後このような住民主導のコミュニティガーデンがますます増えることとなれば、東京をはじめ日本の都市は緑の多いゆとりある都市となるばかりではなく、それぞれの地域・街において現代では希薄になりつつある「つながり」を生み出すことができる。

これからコミュニティガーデンが発展し、より多くの人々が携わる活動となるためには、コミュニティガーデンが持つ機能とその多くのメリットが社会に広く知られていくことが重要であると考えている。繰り返しになるが、コミュニティガーデンが対応できる分野は環境・コミュニティ・健康・福祉・教育等、幅が広く、1つのことでここまで多数の分野を網羅できる活動は貴重だ。そして、今後も続く都市化や少子高齢化のことを考えるとこれらの分野への取り組みの重要性が増すことは明らかであるため、その対応策としてコミュニティガーデンの有望さを主張したいのである。この論文がそうしたコミュニティガーデンの可能性について伝える役割を担うことができたならば筆者としては幸いである。

5-3. 謝辞

最後に本論文執筆にあたり、お世話になった方々への感謝の気持ちをお伝えしたいと思います。

3章で取り上げさせていただいた今宿コミュニティガーデンでは、会長である木村様並びにメンバーの皆様に御礼を申し上げます。地区センターでの夏祭り・保育園の食育行事・収穫祭と何度も行事にお邪魔させて頂き、大変お世話になりました。ありがとうございました。

4章で取り上げさせていただいた目黒天空庭園では、突然のヒアリングのお願いにも丁寧に対応してくださった樋口様並びにNPO大橋エリアマネジメント協議会の皆様、栽培ガーデンクラブ代表田村様並びにメンバーの皆様に御礼を申し上げます。ヒアリングのお願いに快く応じて頂いた上、秋の収穫祭に参加させて頂きありがとうございました。

そして、本論文の主査である浦野正樹先生に深く御礼申し上げます。1年以上に

渡って論文へのアドバイスを下さり、完成に導いて下さったこと、大変感謝しております。
ありがとうございました。

最後に、ゼミの同期、及び後輩の皆様にも感謝をお伝えしたいと思います。皆様が的確なコメントや温かいアドバイスを下さったおかげで、自分では考えの至らなかった部分にも気付くことができたという経験は数え切れません。本当にありがとうございました。

参考文献

- 一般社団法人日本公園緑地協会『公園緑地 社会の変化・公園の変化 第七十六巻第一号』
2015年
- 小野佐和子『こんな公園がほしい～住民がつくる公共空間～』築地書館、1997年
- 越川秀治『コミュニティガーデン 市民が進める緑のまちづくり』学芸出版社、2002年
- 財団法人東京市町村自治調査会『「公園」を舞台とした地域再生～あなたが主役の「好縁づくり」～調査研究報告書』2009年
- 佐藤誠・篠原徹・山崎光博編著『農学基礎セミナー グリーンライフ入門 都市農村交流の理論と実際』農山漁村文化協会、2005年
- 申龍徹『都市公園政策形成史 協働型社会における緑とオープンスペースの原点』法政大学出版社、2004年
- 進士五十八『ボランティア時代の緑のまちづくり 環境共生都市の実態』東京農大出版会、2008年
- 高村学人『コモンズからの都市再生』ミネルヴァ書房、2012年
- 田代順孝・中瀬勲・林まゆみ・金子忠一・菅博嗣編著『パークマネジメント 地域で活かされる公園づくり』学芸出版社、2011年
- 千葉県市民農園協会『市民農園のすすめ』創森社、2004年
- 坪郷實『新しい公共空間をつくる 市民活動の営みから』日本評論社、2003年
- 特定非営利法人屋上開発研究会『都市の空閑地を利用した市民農園の開設 平成21年度報告書概要版』
- 中瀬勲・林まゆみ編、橋本敏子(pp.106~121)、赤澤宏樹(pp.195~199)『みどりのコミュニティデザイン』学芸出版社、2006年
- 日経BP社『日経コンストラクション(592)』2014年
- 日本園芸福祉普及協会『園芸福祉のすすめ』創森社、2002年
- 日本建築学会編『緑地・公共空間と都市建築』日本建築学会、2006年
- 日本造園学会編『緑空間のユニバーサル・デザイン』学芸出版社、1998年
- 松尾英輔『社会園芸学のすすめ』農山漁村文化協会、2005年
- 廻谷義治『農家と市民でつくる新しい市民農園』農山漁村文化協会、2008年
- 目黒区『大橋一丁目街づくり事業史』2013年
- 今宿コミュニティガーデン友の会 Web サイト <http://imacom.org/index.htm> (2015年11月24日閲覧)
- 国土交通省「都道府県別一人当たり都市公園等整備現況 (平成26年3月)」
http://www.mlit.go.jp/crd/park/joho/database/t_kouen/ (2015年11月21日閲覧)
- 国土交通省「平成24年度末種別毎都市公園等整備現況」
http://www.mlit.go.jp/report/press/toshi10_hh_000149.html (2015年11月21日閲覧)

東急電鉄「みど*リンク」アクション <http://mido-link.com/about.html> (2015年11月24日閲覧)

目黒区「年齢別人口表(統計)平成27年度(2015)」

http://www.city.meguro.tokyo.jp/gyosei/tokei/tokei/jinko/nenbetsu_sokei/njinko2015.html (2015年11月22日閲覧)

目黒区「みどりの実態調査(平成26年度)」

http://www.city.meguro.tokyo.jp/gyosei/tokei/chosa_hokoku/midorijittai.html (2015年11月23日閲覧)

目黒区「目黒天空庭園・オーパス夢ひろば」

<http://www.city.meguro.tokyo.jp/shisetsu/shisetsu/koen/tenku.html> (2015年11月24日閲覧)

横浜市環境創造局 <http://www.city.yokohama.lg.jp/kankyo/data/ryokuhi/ryokuhi.html> (2015年11月21日閲覧)

横浜市統計ポータルサイト「旭区 公園・緑地」

<http://www.city.yokohama.lg.jp/ex/stat/ward/asahi.html> (2015年11月23日閲覧)

横浜市「横浜市の人口 ～平成26年中の人口動態と平成27年1月1日現在の年齢別人口～」 <http://www.city.yokohama.lg.jp/ex/stat/jinko/dotai/new/index-j.html> (2015年11月22日閲覧)

NPO 大橋エリアマネジメント協議会 Web サイト「大橋のまちづくり」

<http://machi-oohashi.net/> (2015年11月24日閲覧)

今宿コミュニティガーデン友の会「今宿コミュニティガーデンご案内」プリント

NPO 大橋エリアマネジメント協議会「目黒天空庭園栽培・オーパス夢ひろば活動団体」プリント